

## 經濟學・經濟學史

\*高田保馬 マルクシズムの經濟學的批判

(昭七四、青年教育普及會、四六判一三〇頁、W.C.O.)

この書物とおなじ表装で、おなじところから、ほかに数種の著作が出版されてゐる。共通の目的からみて、一種の叢書である。叢書としての銘はうつてない。序文を「思想問題研究會」が執筆してゐる。つぎに全文をかゝける。——「歐米の學界を展望するに、マルキシズムの經濟學説は學問的には既に過去のものとして清算されて居る。然るにも不拘、我が國に於て今尙それが斬新なる學説の如く考へられて居ることは、寔に遺憾なる現象と謂ふべきである。本書の如く徹底的にマルクス經濟學の急所を衝き、その誤謬を明示せる批判書は稀である。然も、經濟學者たり、社會學者たる著者は、マルクス經濟學に對し其の鋭鋒をむけ居るのみならず、更に唯物史觀に對しても著者独自の立場より明快なる批判を下してゐる。我々は、本書に依り教示せらるる所甚大なるを信ずる。之敢て本書を廣く

經濟學・經濟學史

世の志ある人々に推奨する所以である。」

つぎに目次をあげる。一、緒言 二、マルクス經濟學の大要イ労働價值説ロ平均利潤學説ハ人口過剰の理論ニ商品過剰の理論 三、マルクス經濟學の批判イ労働價值説の批判ロ人口及び商品過剰理論の批判 四、唯物史觀の批判イ唯物史觀と經濟理論との關係ロ唯物史觀の要領ハ唯物史觀の批判 五、結語。「マルクスにしてその唯物辯證法なる部分を説くことなく、又唯物史觀を説くことなしとしても、矢張り、その經濟理論を残してゐるならば、彼は必ずや近世における大いなる思想上の一人として認められると思ふのである。その意味においてマルクスの學問上における最も大きな功績は——是は私だけの考へ方ではない——經濟理論の側にあると思ふのである」とは著者の冒頭のことばである。著者は經濟學説の發展を三段にわけ、第一の段階を客觀學派、第二を主觀學派、第三を均衡學派とする。第一は十九世紀の半ば或はそのすこし後まで、第二は十九世紀の後半ことに二十世紀にちかひと見る。この第三の均衡學説

は「今日の日本の經濟學界には尙ほ未だそれ程に根を張つて居らぬが、矢張り、外國の經濟學界と同様に日本の經濟學界が進んで行く途はこれより外には先づあり得ないと私は信じてゐる。」(八・九頁)「この最も新しい經濟理論(均衡論の立場)に立つて見れば、マルクス經濟學は今日新興の經濟學と言はれてゐるに拘らず、その實十九世紀半ばまでの經濟理論であつて、今日の經濟理論ではないのである。それは成程階級的乃至黨派的には生きて居る考であらうが、純理論として見れば、現在生きて居る所の經濟理論とは言ひ難いのである。是は冷靜に今日の經濟學界の大勢を見る人の何人とも疑ふことの出来ない事實であらうと思ふ。」(九頁)労働價值説の批判では、ベーム・バヴェルクの「労働價值説の終焉」(二種の邪譯あり)が獎められてゐる。おなじ著者の「労働價值説の吟味」(理論經濟叢書第一篇)一九三一年、も一々參照されべきである。もつとも大事な点として指摘されてゐるのは、「労働の質の比較の問題、即ち、複雑なる労働と單純なる労働、言ひ換へれば、熟練労働と不熟練労働、この二つの比較

\*印ハ單行本

の問題」である。「労働價值説の中の最も根本的な難點といふものがそこに含まれてゐる。」「一九頁——この問題は、前掲「吟味」の第一章労働の異質性において、餘蘊なく論じつくされてゐるが、これにたいする日本のマルクス學者がはからの駁論は、いまにいたるまでみられない。すなはち反駁すべからざる難點のひとつとして、のこされてゐるのだといつていい。經濟學の發達を簡明に三段にわけるといふ仕方は、著者の思想の根底をなすものであり、著者みづからは第三の均衡論の立場（勢力説はそのEducationである）にゐるのであるが、均衡學説といふものは、主觀學派ないし限界效用學派から直接に發展したというてまたげないものであるし、客觀學派のなかに均衡思想が素朴なたちで存在してゐたこともあらそへないのであるから、均衡學説をもつて、舊學説と對立する意味の第三の新説であるとするかどうかとおもはれる。たとへば十九世紀末にできたマーシャルの体系のごときものは、——公平にみて時代を代表する体系であるが——みぎにいふ三段の學派のいづれに屬してゐるの

あるか？そこには生産費説・限界利用説・均衡理論の三つが、綜合されて生きてゐるしないか？そこにあるのは折衷ではあるまい。（折衷といふものは藝術の世界では可能だが、科學では可能でない。科學で可能なものは綜合だけである。）マルクスの經濟理論が、今日の均衡理論の立場からみて、部分的に素朴不透明であり、剛直不完全であるといふことは、うたがへない。だが、それは把握の方法におけるものであつて、把握の對象におけるものではあるまい。マルクスが把握したものの科學的規模にたいして、純粹の均衡論それ自体がどれだけ代位の任をはたしうるかといふ問題になると、うたがはしくなるのではないか？マルクスの經濟理論が成立の年代からみて過去のものであり、あたらしいものでないといふ説にたいしては、反對者はひとりもありえない。それでもマルクス説が「過去のもの」として葬りさられないのは、プラトン、アリストテレスの哲學が「過去のもの」として葬りさられないのと、ほとんどおなじやうなことですらあるかもしれない。經濟學の讀者を、マルクスにちかつか

しめないといふことは、このやうな解説の仕方の範圍においては、のぞみがたいこととおもはれる。

\* 高田保馬「經濟學の近狀と世界經濟の動

き」（昭七四、青年教育普及會、四六判五六頁、昭七四）

「思想問題研究會」はこの書物につぎのやうな序文をあたへてゐる。「本書は現下の經濟學界におけるマルクス經濟學の學問的地位を明かにし、又最近の世界的不況の原因及びその打開に就いて論じ、更に無產者の將來に關する豫測、並びに、貧富の距離を少からしむるために我々は何を爲すべきか（圈点は解題者）を論じたものである。現代の如く、マルキシズム横行し、労働問題、社會問題の喧しき時代においては、叙上の諸問題は世人の大なる關心の對象となるべき事項なるのみならず、又之について思索し、考慮し、穩健中正なる見識を養ふべき事項である。」云々。目次はつぎのとほり。

——一、經濟學の近狀 二、世界經濟の動き（世界不況の原因口世界不況の展開ハ階級問題）「今日の日本に於て、殊に青年等の間に於てはマルクスの經濟學の流れを以て新興經濟學であるとし、その他の學派はや

がて之に依つて取つて代はられ消滅すべき古い考へ方であるとして居る様であるが、併し、私は之に反對して斯う言ひたい。即ち、この新興の科學の如く考へられて居る、マルクス經濟學は、實は十九世紀半ばの遺物であつて、その後の經濟學に於ては變轉が度々行はれて、今日は全く異つた學說に依つて取つて代はられて居る。而して、これが歐羅巴並びにアメリカの經濟學の大勢である。只、日本に於ては學問が大体輸入に依つて打ち建てられて居り、その輸入が遅れである爲めかも知れぬが、(箇点は解題者)十九世紀半ばの學說を以て今日新興の學說と考へて居るのであると思はれる。故に、やがては此の學說も時と共に清算されねばならないといふ事だけは斷言出来るのである。」「(一・二頁)マルクス經濟學の著作としての成立は、十九世紀の半ばである。それがひとたび歐米の經濟學界を支配し、やがてその地位が新興派によつて「取つて代はられて」しまつたが、いまや時おかれて日本に輸入されたものだといふやうな印象をあたへることは、讀者を誤解にみちびきやすい。日本においてマルクス經濟

學が「新興經濟學」とよばれるはあひがあるとするれば、それは新生の科學といふ意味よりも、新興階級のための科學・プロレタリアートの立場における科學といふ意味であらうから、一部の讀者は科學がうまれた時期の前後をとはないのであらう。讀者は科學の「新」をもとめるのでなく、おのれの諸疑問にこたへる科學としてのマルクスの体系をもとめるのであらう。近時マルクス經濟學の日本における「流行」は、「輸入が遅れてゐる爲め」でもなく、それが科學としてあたらしいためでもなく、要するにマルクス主義全体にたいする國民の關心のふかまりとひろまりにもとづくのである。政治的的信條としてのマルクス主義がヨーロッパとアジアの二大陸にまたがる一國に革命を成就したといふひとつの歴史的事實とむすびつけることなしに、この國におけるマルクス經濟學の「流行」は理解すべくもない。また、マルクス經濟學は生れてから一度も世界の「學界」をうちなびかせたことはなく、いまでもない。限界效用學說は生れるとすぐ「學界」を支配した。日本における近年の事情は特殊であるけれども、

マルクス經濟學は講壇におけるよりも、ジャーナリズムのうへで普及し、「學界」を支配したのでない。マルクス主義の學者教授たちは、マルクスの咀嚼にいそがしくて、科學の進歩に貢獻する餘力をもたず、餘力があつても、それを科學の普及と大衆化のために、ジャーナリスティックな方面に、かたむけつくした。したがつて、嚴密に科學的研究と稱すべきほどの業績が、マルクス主義者から「學界」におくられた例は、むしろとほしい結果になつてゐる。逆に、マルクス批評におけるこの著者の「勞働價值説の吟味」(前出)のごときものに、科學的作業たる本質がみいだされるのである。それにつけ、この教化的な書物の趣旨からみても、みぎのやうなマルクス「流行」にたいする解釋および態度はどうかとおもふ。なほ、著者は序文にいはいゆる「貧富の距離を少からしむるために我々は何を爲すべきか」といふ問題に該當するところで、つぎのやうに説いてゐる。——「無業層者の地位が上るにつれて、恐らく經濟上の階級的的地位の距離も段々と縮まるだらう。……之を高い所に縮める事勿れ。此所に吾々東洋

人として東洋人固有の考を出すべき點があるのである。決して吾々はその点に就いて、西洋人の自然征服を以て唯一の眼目とする西洋生活の姿を學ぶべきでなく、宜しく低い所に落付くべきである。低い所に落付けば失はれるものは何もない。自分の地位を人に見せる爲に苦しい努力をする。それが悪いとは言はないが、斯くの如き生活が吾々に何の意義を持つか。吾々の幸福は何を食ひ、何を着るかに依つて決するものではない。その根本は吾々の要求（生理的

要求の意味か、精神的意味か、わかりにくい）が満たされる事に依つて支配されるのである。吾々の時代の貧乏なるものの數を變へねばならぬ。これは何に依つて動くか。社會生活に依つて動く。即ち、「社會生活を低く樂くに於て貧乏を驅逐する事が出来る。」著者の意味するところは大体わかるけれども、「貧富の距離を少からしむるために」いかなる方法をとるべきか、といふ問題はこたへられてゐない。日本人が全体として生活水準を上げべきであるといふ主張は異色をおびてゐる。幸福問題について、economic welfareといふやうな

近代經濟學の根本思想をよそにして、東洋的な人生觀がみちびきいれられてゐることも、一代にすぐれた理論家たる著者の所説としては注目にあたひする。

\* 河上肇 資本論入門（發條後の改訂版、昭和

一二、改造社、菊野本文九六四頁、H. 500）序文にゴルキーのことはが引用されてゐる。「彼れ（マルクス）の教理は、當時ニウトンおよびダーキンの學説がさうであつたやうに、それ以前の科學的諸知識の天才的完成である。」完成といふのは、個人的・主觀的なものであるまいか？ 科學は完成することのないものであり、技術もさうであらう。藝術のみは、やゝ性質をことにしてゐる。完成といふことばがあてはまるのは、ひとつの作品や著作のばあひである。マルクスの科學的業績がひとつの大なる綜合であつたといふのは正しい。完成であるといふのは、まちがひをみちびきやすい。そのまちがひからして、マルクスの學説を絕對的に擁護しようとする態度のひとつがうまれてくる。おなじ態度は政治的立場の必要からもおこるのではあるが。——この書物はマルクス資本論第一卷（一八六七年）だけの解

説書だ。だから全卷二十五章の構成も各表題も原本のそれと、すっかりおなじである。わかりやすい日本語に書きあらためられた資本論第一卷であるとおもへばよい。マルクスの研究を先へすすめたものでも、さらにふかめたものでもない。丹念に咀嚼してゐるのである。咀嚼したもの是一般讀者のうちにいれてやるのである。さういふ意味で、著者の技倆は、この國のすべての經濟學者をしのいでゐるといつていい。

著者は日本におけるマルクス經濟學の偉大なる教師であり、啓蒙家であるけれども、他の日本のマルクス學者とおなじやうに、科學そのものの發達のために貢献してゐない。科學の普及のために力をつくしてゐるだけである。また、マルクス以後の一般經濟學の發達には、部分的に見るべきものがないといへない。さういふものにたいして、マルクスの立場からする批判が期待されていいのに、マルクス派の學者は、さういふ仕事に手をつけたがらない。これは科學者としての懈怠であらう。だが、河上博士がひとつの學說体系の咀嚼のためにつひやされた年月、および、そのあひだの著述の

かずかずをおもへば、この書物は一箇の完成であるといへよう。——同題の書物は一九二八年(昭和三年)ごろ、さきの「社會問題研究」(價廿錢)とならんで、原則として毎月一冊づゝ分冊(頁數・定價不同)で發行され、翌年におよんだのであるが、それは第一篇第三章にいたるまでにとどまる。この書物はその全体にわたつて訂正し、分冊として發行されなかつた部分をくはへて一卷にまとめたものである。第二篇第四章から第七篇第二十五章までは既刊の「資本論略解」を利用したほかは、全部あらたに公刊するものだと思ふことはつてゐる。一九二九年十二月發行のおなじ著者の「マルクス主義經濟學の基礎理論」(改造社版經濟學全集第八卷)は、下篇を(マルクス主義經濟學の出發点)と題し、序説のほかに、第一章商品、第二章交換過程からなりたち、その末節はこの書物では三一七頁にあたる。だから、この書物はみぎの著作の改版ならびに、續篇であるともいへる。著者には別に「經濟學大綱」(改造社版經濟學全集第一卷)一九二八年があり、上篇を「資本家的社會の解剖」と題し、資本論全三卷の解

## 經濟學・經濟學史

説にあてられてゐるから、この「入門」をよみをはつた讀者が、さらにおなじ著者の著作をとほして資本論をよまうといふには、「大綱」の二三頁以下をよめばいい。「大綱」上篇の前半を構成してゐるものが、この「入門」にあたるのである。資本論の引用は、河上・宮川共譯資本論から、まだ共譯のでてゐない部分からの引用文については、カウツキー版の頁數がしめされてゐる。「本書は讀者を『資本論』そのものに誘ふための一の手引にすぎない。『資本論』の代りになるやうな本は、私には書けないのは勿論、恐らくそれは誰にも書けない。」(著者序文)この書物には、日本のマルクス批評家(小泉信三・土方成美兩教授)にたいする反批判もふくまれてゐるが、それらの部分はさきの分冊で發表されたものである。「限界效用説の階級的意義」を註するところには、つぎのやうに書かれてゐる。

『吾々は以上の理由から(と)いふのは「使用價值」としては、諸商品は何よりも先づ異なる質であるが、交換價值としては諸商品はたゞ異なる量でありうるにすぎず、それゆゑに使用價值の一分子をも含まない』

マルクス) 交換價值の本質は何であるかの問題に關しては、諸商品の使用價值を全然問題外に置くのである。その點においては今日廣く學界で行はれてゐる限界效用説なるものと全然正反對である。限界效用説は交換價值を效用(使用價值)から説明しようとするものであり、従つてそれは使用價值と交換價值との對立を全く見ない學説である。商品のうちに含まれる使用價值と交換價值との對立は、現代社會における諸矛盾の根源(圈點は解題者)であるが、一旦限界效用説の如き出發点を探るならば、かゝる矛盾の根源が全然隱蔽されるがゆゑに、現に吾々の眼前においてあらゆる方面に起りつゝある紛々の矛盾に充ちた諸現象の必然性は、全く説明されないものとなる。だが、さうあればこそそれは現代社會を觀念的に調和の世界となすことにより、これが永遠性を論證しようとする意圖に對して、まことに好都合な立場なのであり、そこに限界效用説に對する執着の階級的意義が横たはるのである。〔二二〇頁〕——だが、商品における使用價值・交換價值の對立が、現代社會の諸矛盾の「根源」であるといふ説は、

どうかとおもはれる。資本論の叙述の形式では、いかにも出發点において説かれてゐるが、叙述の發端にくらゐるものが、事物における根源的なものであるといふことは、どうかとおもはれる。ブハーリンの限界效用説批判には、まだ聴くべきことが多けれども、この問題にかゝるはるかがり、この著者においては、學問的に耳をかすべきことがとほしいうらみがありはしないか？ のみならず、著者が他方において、マルクスの「價值」概念に、主觀學派のそれをおきかへてゐるやうなふしが見えるのは矛盾ではあるまいか？ ロビンソンの生産の諸關係のなかに、「價值のあらゆる本質的な規定が含まれてゐる」といふマルクスの「價值」とは、いふまでもなく、商品分析にいふ交換價值でなければならぬ。ロビンソンの世界に「價值」そのものがありうるわけではないから、ありうるのは價值法則にたいする本質的な規定だけである。この本質的な規定のみは商品生産社會にも、ロビンソンの世界にも共通の規定である。しかるに著者によれば、價值、そのものがロビンソンの世界に存立し、「種々なる生産物

は、その生産のため平均的に必要とされる労働時間に應じて價值ありとされる」といふのである。これがマルクスのロビンソン物語にたいする河上博士の解釋である。ロビンソンにとつて「價值ありとされる」といふ博士の價值は、マルクスのいふ價值でなくて、個人的な價值、むしろ主觀的な價值ではないか？ この点において、著者は、むしろマルクスによつて批判されたアダム・スミスあたりの主觀主義的労働價值説へ逆行しつつあるやうにみえる。この書物のごとく多年にわたる推敲によつて書きあげられた書物は、この國には稀有である。著者の綿密なゆきとどいた用意は、さきの分冊との對比において、隨所にたしかめられる。しかも、これだけの著作が索引なしで出版されたといふことは、おどろくべきことだ。

\* 五島茂 **ロバート・オウエン著作史** — 協同

の一研究 — (大阪商科大学研究叢書第一冊、昭七・四、大阪商科大学經濟研究會、(神戸)ぐらうあそきてて發賣) 初判 序文その他一六頁、本文五四三頁、索引一八頁、補遺七一頁、挿入寫眞一五葉、\* 1000。この叢書は大阪商科大学經濟研究會がその會

員の研究調査の成果を公表するための「三種の姉妹叢書」のひとつである。著者は「恩師本位田祥男先生」にこれをささげ、さらに「序」のなかで、「このまづしい處女論著をわが學長河田嗣郎博士と恩師本位田祥男先生とに捧げる」ともいつてゐる。なほ、この著作の「直接契機」となつたのは、堀經夫博士の「厚意」であると、しるされてゐる。博士は日本におけるオウエン文獻所藏者のひとりだ。この書の目標は、マルクス主義的立場におけるオウエン文獻の「再認識」である。「すなはち、彼の文獻的遺産を、それを基本的に規定した當時の生産的社會的諸條件との複雑極まりなき關聯から、どこまでも具体的に分析してゆかうとする立場だ。……だからその文獻的遺産を貫くオウエンの思想体系の發展は、若干の相對的獨立性を認められつゝ、しかもイギリス・プロレタリアートの生長史、從つてその解放運動史の一齣として把握され得る」その立場から、この書は第一に、「著作史」とよばれる「特異なる体系を定立」することによつて、方法上の問題を提起する。書の批判は Billingslayer の任務にあらず

とし、内容の説明の必要すらうたがはれてゐる書誌學の概念をしりぞけ、技術以上の綜合的作品としての「著作史」の意義を立證しようとする。著者はこれまでの唯一のオウエン書目たる *A Bibliography of Robert Owen, The Socialist, 1771—1858* (1925改訂再版) を批評して、「在來の書誌としても多くの缺陷を指摘し得る」といひ、「第一に、オウエンの著作に限つてみても、所掲の著書は一〇三種、多少の例外はあるが單行本に限られ、それが各初版刊行年によつて年代順にならべられ、各年次内においては書名の *alphabetical* 順に配列されてゐる、各文献は簡單に出版地名・書店名・大きき・頁數のみを示し、終りに書名索引を付し、一見整然としてゐるが、かゝる配列方法は、實は普通に行はれる單純な *chronological* な方法に劣るのだ……のみならず書名を往々 *title* の一部に限定し、重要な *subtitle* も所々省略してあるため、その点の詳密さにおいて却つて F. Podmore: Robert Owen. *A bibliography* (1923年再版) 卷末の書目に劣る……第二に、オウエン編纂の定期刊行物の項を不當に簡單にしてしまつたため

に、至要な一八三〇年代の如き、オウエン著作が單行本の數乏しき理由だけで異常に無活動と見える矛盾を示し……第三に、オウエン研究の論著の項は便利だが、配列に至つては、單なる著者の *alphabetical* 順だ。Eschle はかゝる順配列を『全く知的懶惰か *imagination* の缺如にすぎぬ』と指摘し去つたではないか。要之、その先驅的功績を充分に認めながら、このオウエン書目はあらゆる点から再吟味を要するといふのが僕の結論である。」とむすんでゐる。(序、第二、三頁脚註) 技術問題にたいする慎重な態度のみならず、著者のするどい意氣をうかがひうる。著者は渡英前にこのしごとにとりかき、文献蒐集に「原本主義」を敢行した結果「日本にゐながらオウエンの全文獻的遺産の七五パーセント強の *negative text* に接した」(第二に著者はかくて蒐めえた各文献の發表出版年月究明にうつり、諸本はもとより當時の定期刊行物所掲の記事廣告・book reviews等を廣汎に涉獵して考證判定を仔細に行つた。之は歐米オウエン研究者も未拓の沃野であるが、この究明によつてオウエンの文獻的遺産ははじ

めて眞の發表順にならべられ、全體系の礎石が確立したのだ。——文献の全部に通し番號をつけ(番號數六二二におよぶ)、全體を五期にわけ、一、オウエニズムの生成(一七七一一八一四)二、オウエニズムの發展(一八一四一一八二四)三、空想的コムミユニズムの展開(一八二五一一八二八)四、無産階級オウエニズム(一八二九一一八三四、九月)五、オウエニズムの方向轉換(退却と抽象的爛熟)(一八三四十月一一八五八)とする。各期のはじめに、その期の見透しと批判をかくけて「概説」とする。各期の内部を各「年次」にわけ、まづ、その年次における社會情勢ならびにオウエン・オウエニズムの動きを示す。「各文献の時代的背景を手短かに示す」ためだ。各文献については、通し番號のついた略書名のもとに(1)内容の簡述、(2)發表・出版の動機および當時の客觀的諸條件、(3)その諸效果および批判(4) *Bibliographical Description* (5)日本における所在(堀經夫博士藏書、星島茂教授藏書、東北、京都、東京の各帝國大學圖書館または研究室、等々十一ヶ所)といふ順序で記述する。「オウエンの

活動が實質上その社會的重要性を喪失した後は、文献の數こそおびたしいが、論述は故意に極めて簡約にした——著者みづからいふこの著作史の「缺陷」は日本における「資料不足」にある。だが、この書の出現まで、日本のいかなる人も、自國におけるこのやうな著作および出版の可能を信じなかつたであらう。この書は、日本におけるオウエン書誌として、無比の貢獻であるのみならず、「著作史」の方法の具体的提案として、また、そのいたいたしく良心的なる作業の一典型として、すべての圖書解題編纂者 bibliographer にたいする刺激にみち、一般讀者にたいしても普通の書誌とはまつたぐちがつた感觸をあたへてゐる。そのいきいきしさは、むしろ歴史書、理論書の或るものをしのぐ。——補遺は、著者渡英後大英博物館所藏の分についてなされたもので、「原資料の缺除によつて犯した幾多の誤謬や論斷の早計きをこゝに是正する機會に恵まれ、本著作史の精確化に努めたこと、げに胸あふるうれしさである」といつてゐる。おそらく著者は、さらにオウエン文献の蒐集をもつてきこえてゐる

National Library of Wales その他二三をたづね、補遺を完了するのであらう。だが、著者の目的はそれをもつてをはるのではない。この書は「もと著者のオウエン新研究の序説なのだ」その「第四期、第五期」にはれた著者（五、五、五）年來の主張は、オウエンへの常識的傳説的解釋と鋭く對立するものを多々含む。……事實、階級的消費組合の強力な據頭期の今日、Rothschilds の自己批判としてその源流オウエンを、かゝる角度から見なほすことは若干の現實的意味をもちうるであらう。然るに本書では、……單に新らしき角度からの近代協同イデオロギイ史の端緒を示すに了つて、それ以上の立入つた諸分析は遺憾ながらことごとくを嗣出すべき第二の Aeneid にゆだねなければならなかつた」（序、viii）マルクス主義的立場からするロバート・オウエンの再認識については、この著者の將來に十分期待がかけていゝであらう。

\* 中山伊知郎、高垣寅次郎、高田保馬 **經濟學の基礎理論**（經濟學全集第五卷、昭七・五、改造社、四六判五〇五頁、2000）中山伊知郎「數理經濟學方法論」（三一—二五四頁）、高垣寅

次郎「經濟理論の心理學的基礎」（二五五—四〇三頁）、高田保馬「經濟學方法論」（四〇五—五〇五頁）。三篇いづれも本全集のために起稿されたもの。中山教授は「はしがき」にいふ、「經濟學の最近の傾向に注意する人々は、それが實證的な研究においても又理論的な研究においても著しく數理的になりつゝあることを見逃し得ないであらう。この中特に理論的研究における所謂數理經濟學は吾國においてはその重要に比して從來最も閑却せられた一分野であつた。本篇はこの數理經濟學の本質と主たる内容とを大體講義風に論述せんと試みるものである」と。かかるくはだては日本語における最初のものであり、著者はそのくはだてにみごとに成功してゐる。著者は、日本にあらはれた最初の「數理經濟學者」である。同種同程度の著作は、ほかのいかなる日本學者から期待することもできないであらう。「遺憾ながら充分の時間を有しなかつた爲に自ら不完全とする所が多い」と著者みづからいふにかゝはらず、この全集のなかで、もつとも深い準備によつて成立した著作のひとつであることも、うたがへな



い。この一篇執筆のための準備でなくて、科擧そのものためのたしかな準備である。序説のほかに四章からなる。第一章總論、数理經濟學の本質、一、純粹經濟學としての数理經濟學二、純粹經濟學の本質三、純粹經濟學の構造——均衡理論四、均衡理論と數學的方法五、經濟學における數學の援用六、數學援用の限界七、数理經濟學に對する非難とその批評 第二章數理經濟學の基本内容 一、經濟現象の一般的相關々係二、均衡狀態——靜態の假設三、均衡理論の意義 四、五、數理經濟學における二つの傾向 六、七、二傾向の綜合としての一般均衡理論 第三章數理經濟學說略史、一、學說史の分類方法二、第一分類・前史 (1) イスナール (2) カナール (3) ヒウウエル三、第二分類・部分均衡理論 (1) クールノー (2) デューブユイ (3) ゴッセン (4) ジェヴォンス 四、第三分類・一般均衡理論 (1) ワルラス (2) パレート 第四章數理經濟學の最近の問題、一、靜態對動態の問題二、純粹理論と實證的統計的研究との結合。——高垣博士は序にいふ、「經濟心理學は予が海外留學の當時より心を潜めた問題である。かねて思へらく、經濟現

象の擔當者は人間にして、經濟は人間社會の事實である。従つて經濟理論を打立つるためには、心理學の助けを借らねばならぬと。……予は經濟學を以て心理學の一部門とするものではない、たゞ經濟現象本來の性質に顧みて、心理學研究の成果を借るにあらざれば、その根本的究明は期せられなとするのである。本書においては尙ほ私見の總てを組織的に叙説することを得ず、僅かに、從來心理主義經濟學說と見らるゝものゝ不備なることを檢討し、(第二節快樂主義心理學說の批判) 心理學發達の最近の傾向を述べ、經濟理論の心理學的基礎を探究るべき領野を示し、(第三節心理學發達の最近の傾向) 假に心理學的基礎法則の一を擧げて、予が主張の一端を明かにすることを期した。(第四節心理學的經濟學說における基礎法則) 價值及び價格の研究を初め、經濟組織、經濟動態に關する諸問題をば、心理學說の根據の上に解明することに就ては、沈潜なほ研究成果を世に問ひ得ざるところである。」と。全卷が緒論および結語のほかに四節からなる。第一節は、心理主義經濟學說の展開と題し、その項目に

くるものは、第一、限界效用學說第二、ゼヴォンスの心理主義理論第三、リーフマンの主觀主義理論 第四、厚生經濟學の根據 第五、制度主義經濟學說の主張の五項である。(第五の Institutionalism が、心理主義經濟學說の展望のなかに包攝された理由は、この學派がアメリカにおける「最近心理學の發達に呼應し、根據を茲に求めてゐる意味において看過してならぬ」ためである。) 第四節において、その一方的な深みに到達してゐる著者獨自の研究は、さきに學界に發表され、すでにあまねく知られたものである。「茲にヴェーバー・フエヒナアの法則を取りて、詳細にその發展の内容を檢し、予の見るところを以て批判を加へたるは、經濟理論の心理學的基礎づけのために殊に重要な法則なるが故であり、之によりて心理學的經濟理論の意義の一斑を示すに適切なりと信ずるからである。需要供給說、限界效用說、若くは貨幣數量說と云ふ如く多くの經濟學上の主要理論は、之に據らざれば因果的説明を期せられざるに拘らず、學者敢てこの關係を顧みんとはしない。」著者の結語の一節である。著者が經濟理論

## 經濟學・經濟學史

の心理學的基礎づけをこころざすのは、それによつてはじめて經濟現象の「因果的説明」が可能となるとの見解にもとづく。著者はかかる見地から價值および價格が説明されなければならぬとするのであつて、一部の心理主義者のごとく價值論を排除しようとするものでない。——高田博士は序にいふ、「私が茲に述べようとするところは、場當りの思ひつきではない。多年自ら經濟學の研究に沈潜する間に抱きつゞけて來た見當であり、拙くとも私の個性そのものと切りはなしがたきものである。何等格別の創見がその中に含まれて居るとは云はぬけれども述べるところは私の個性そのものに根ざしてゐるものであること、云々と。またいふ、「目ざすところは、理論經濟學の學問的性質を明にすることにある。……まづ、理論經濟學と學問的性質を一にするところの社會科學一般が如何なる學問的性質を有するものであるかを明にする。然る後、理論經濟學が他の社會科學と異なるところを明にする、これは畢竟、その對象とするところの經濟の本質を闡明することに外ならぬ。此第二段の仕事は必然その中

に、理論經濟學内部に於ける區分、別して靜學と動學との區分が如何に見らるべきかを取扱はねばならぬであらう。而して此二段の仕事に附隨して經濟政策と理論經濟學との關係を吟味しよう。これが第三段の仕事を形づくると思ふ。云々と。第一章理論的社會科學の性質では「理想型的法則に代ふるに本質學的法則を、理想型に代ふるに本質的定型を以てすることを主張し、マクス・ウェバアの批判をこえて、獨自の説に到達されてゐる。第二章理論經濟學の性質では、個人の行動の總体だけでは、經濟は成立しないものとし、「社會的秩序」によつてはじめて、個人の慾望は「調節と規則性」とが與へられる」(四四一頁)とする。つまり、經濟は本質的な意味においても、社會的に成立するのみである。「秩序を社會的なものとして解釋したい」(四五五頁)とあるのも、その意味である。博士のこれまでの説は、ここで改修されてゐるやうにみえる。第三章では經濟理論と經濟政策學との關係が論じられてゐる。全體が、さうながいものでないが、念々、諸科學の實體を目からはなすことなしに、説きすゝめられた

## 一二二

方法論として、よき刺激にみちてゐる。

\* 近藤康男 **農業經濟論** (昭七四、遠野書店、菊判序文三頁、本文四六二頁、挿入の表二葉、表二葉。)

この著者に「チウネン孤立國の研究」一九二八年、その他數種の著作がある。東京帝國大學助教。横井時敬博士著「小農に關する研究」(一九二七年)およびその他の日本における農業問題に關する述作の「基本的缺陷」は「農業の特殊性の單なる強調および「過去の生産關係への徒らなる回顧」にあつた。だが、「農業の特殊性の研究は今日の資本主義社會の發展を具體的に把握するための一要素としての意味あるものである。吾々がとり上げねばならない問題は社會總資本の蓄積運動の中に於て農業乃至獨立小生産者が、如何なる役目を果たすか、かゝる役目を達することによつて農業乃至獨立小生産者自身の如何なる發展が必然であるか、である」(序文)著者はこの書物のなかで「帝國主義時代に於ける投資による植民地農業支配の問題の研究(主として第五章)に於て、資本の國際爭覇戦に深く觸れて考察することの出來てゐないこと」を遺憾とし、他日を期するといつてゐる。

る。しかし「從來餘りに目に見える現象許りを追ひかけて、基礎になるところの生産關係を瞭にすることを忽つてゐたため、農業に於ける將來の發展の洞察力を失つてゐた所の農業經濟學研究に對して、多少役立つところあるを自貢してゐる。」といひ、「少くとも科學としての農業經濟學の外延と内包(傍点は解題者)とを抽象的言葉を以つてではなく、不完全ではあるが具体的に、示し得たと考へてゐる」といふ。著者が平常「黨陶を受けてゐる」といふ佐藤寛次、那須浩、荒木光太郎の三教授にたいする「感謝」がのべてある。つぎに目次をあげる。

全卷を五章にわけ、緒論、第一節總資本の蓄積運動乃ち擴張再生産、第二節資本蓄積の困難と非資本主義的外圍、第三節問題、第三章地代——農業に於ける生産關係、第一節平均利潤と農業生産の特徴、第二節小農的經營、第三節小農經濟に於ける地代の形態、第四節農民の過勞と半失業、第三章食糧及び原料市場、第一節農産物の商品化、第二節農産物の自由市場、第四章販賣市場、第一節資本による原料供給と農業の資本主義化、第二節機械と農業資本主義

化、第三節水利農業に於ける資本の農業支配、第五章投資——植民地農業の支配、第一節擴大された規模に於ける販路及び原料市場の問題、結語、農業の諸問題を社會資本の蓄積運動にかゝはらしめた考察の結果として、その運動にたいする農業の補足的役割およびその役割を演ずることから必然に生ずる獨立小生産者の解体が明かにされた。「近世社會のピラミッドの頂点と底邊との間に介在しその崩解を維持してゐる所の中間成員が今や失はれつゝある。中小獨立生産者のプロレタリア化、これこそ吾々が近世に於ける農業發展の追跡によつて見る所のものである。」(四六二頁) つぎに引用された書目の一部をあげる。マルクス資本論第一卷、山田盛太郎・再生産過程表式分析序論、ローザ・クルセンブルグ資本蓄積論、ヒルファディング金融資本論、ブハーリン帝國主義と世界經濟、那須皓・農業政策、河上肇・經濟學大綱、近藤康男譯・チウネン孤立國、近藤康男・チウネン孤立國の研究、ブリントマン農業經營經濟學、近藤康男・農産物生産費の研究、ヴァルガ世界の農業農民問題、カウツキー農業問題、

リヤシエンコ農業恐慌の理論、大内兵衛・家計調査に現はれた給料生活者及び農業者の租税負擔(大原社會問題研究所雜誌昭五・十二)河西太一郎・農業問題研究、Naas: Land Utilization in Japan. Sombart: Hochkapitalismus. Varga: Materialien zur Agrarfrage. E. Bernstein: Voraussetzung des Sozialismus. David: Sozialismus und Landwirtschaft. 等々。認識の方法としてはおよそマルクス經濟學の指示するところにしたがつたものとみることができよう。

\* 古屋美貞 經濟學原論 (昭七・四、内外出版印刷株式會社、菊判本文四六六頁、序文および索引七頁、著者) 著者は同志社大學教授、一九二五年に「經濟學原論」、一九二九年に「經濟學原論講義」の著作がある。「米國經濟學の史的發展」(一九三三年)は大著だといつていい。この書物では「從來の歴史派的心理派的ものを止揚して、制度派經濟學の圈内に突入し、又從來の靜態偏重を排してもつと實證的・分量的統計的方法をとり入れ、又從來の非マルクスの非資本家的立場は愈々益々之を鮮明することに努めた。又價值論においては、從來の費用・效用の均衡説

## 經濟學・經濟學史

を機械論的ではなく會計學的に、靜態的ではなく動態的に一層力説し、その思想體系の統一を期した。(序文)「他の學者の經濟原論と異なるところは、その制度派的・統計派的均衡派的な思想体系にあるであらう。」(同上)「絶えず教育的效果を豫想しつつ」かゝれたものだといふ。全卷を六篇にわかれ、緒論、生産論、交易論、分配論消費論、經濟の全的均衡とする。

## \* 古屋美貞 米國經濟學の史的發展 (昭七・

六、内外出版印刷株式會社、菊判序文七頁、本文六九八頁、附錄文獻表九頁、索引三六頁、挿入圖表一葉、\* 486)「私の主として學んだものは、アメリカ經濟學であつて、親しく教へをうけた著名の學者だけでも、カリホルニア大學におつた Carl C. Plehn, Ira B. Cross, H. R. Hahfeld および當時交換教授としてゐたエル大學の Irving Fisher, トーバート大學においては F. W. Taussig, T. N. Carver, ロンドン大學においては E. R. A. Seligman, Clark 父子 H. P. Willis, W. C. Mitchell, J. W. Angell 及び昨年亡へられたコーネル大學の H. J. Davenport 等々」(序文)著者はアメリカ的ともいふ、

き卒直な明朗さをもつてつぎのやうにいつてゐる。——「私の研究途上に横はつて三つの大なる困難があつた。一は私の未だ經濟原論の蘊奥を究めてないことからこの學說の價值づけ上の困難であつた。二は經濟學史全体に亘つて通曉してないことからこの思想の体系づけの上の困難であつた。三は米國經濟學史は全くの處女地であるために一冊の指針となるべきものもなく、私の苦心努力が凡て暗喑中模索であつたことである。」經濟學史の書き方に三つあると著者は考へる。一、年代的方法 二、批判的方法、三、發生的方法。第三は「思想の發生、發展、影響の全關係を發生的に叙述するもの」、この書物はその方法にしたがふ。米國經濟學は慶應および明治の初年に日本に入つてゐる。福澤諭吉の *Western Land* 紹介(慶應三年)、箕作麟祥、緒方儀一共譯の *A. L. Perry「經濟要論」*(明治二年)福地源一郎、小幡篤四郎、何禮之共譯 *Wayland「經濟原論」*(明治四・五年)、永峰秀樹譯 *Amasa Walker「富の學」*(明治七年)、等々。(序文六頁)二十世紀のはじめ、Marshall が「原理」の改版附録で、アメリ

## 一二四

カ經濟學の發展に目を付け、「米國はずでに經濟實踐の上において主導的地位を占めて來たが、今や經濟思想上においても之と同じ主導的地位を占めんとする兆候がある」と指摘した先見を、著者が序文に引いてゐるのはいい。この書物の計劃について「最初に助言」したのはセリグマンであるよし。全卷を緒論および準備時代、創設時代、發展時代の三篇にわけ、十三章からなる。一、植民地時代—パンフレット時代の第一期、二、十八世紀末葉時代—パンフレット時代の第二期、三、十九世紀時代概観、四、五、六、七、國民經濟學者時代、八、プロクラシカル時代、九、獨逸經濟學の輸入時代、一〇、第一次新興經濟學者時代、十一、二十世紀時代概観、十二、十三、第二次新興經濟學者時代。

\* 猪谷善一 *世界經濟學要論* (昭七・五、森山書店、菊判三四六頁、\* 487、索引のほか、附録に參考書目がある。)歐洲大戰以降における「世界經濟下の若干時事問題に關する綜合的全般的解説」最近時におけるヨーロッパおよびアジアの全局面にわたる諸現象を綜合的に見とほすことが、「現代日本にとり必要

不可缺である」との見地から書かれてゐる。したがって、これは理論の書ではない。

著者は、べつに世界經濟學原理および世界經濟政策の二書をあらはすところざしをつけてゐる。(序文)この書では、世界經濟における五つのブロック經濟(ヨーロッパ、アメリカ、イギリス、アジアおよびロシア)の諸影響を力説する。(そのうち、アジア經濟については、「アジア經濟の展望」が、これよりさきに刊行されてゐる。)全体が五章からなる。第一章世界經濟論、第一節世界經濟學の重要性、第二節世界經濟の意義、第三節經濟生活の世界化。第二章世界商業論、第一節世界商業政策、第二節歐洲大戰と世界經濟、第三節關稅に關する國際協調、第一款戰前、第二款戰後、第四節手續上の改正、第五節關稅の撤廢、輕減及安定、第一款世界經濟會議、第二款輸出入の禁止及制限の撤廢、第三款關稅休日、第六節關稅戰爭。第三章世界工業論、第一節世界工業政策、第二節企業獨占の發生、第三節企業獨占の形態、第四節國內的企業獨占の發達、第一款アメリカ合衆國、第二款獨逸、第三款英國、第四款佛蘭西、第五款日本、第五

## 經濟學・經濟學史

節國際カルテルの發達、第六節國際カルテルの内部機構、第七節國際カルテルの統制。第四章世界金融論、第一節世界金融政策、第二節金融資本の國際性、第三節國際聯盟の財政的活動、第四節償債問題と世界經濟、第一款賠償問題の歴史的考察、第二款賠償問題の經濟理論、第三款獨逸の經濟的窮乏、第四款賠償問題の展望、第五款貨幣價值の安定と世界經濟、第一款貨幣價值の安定、第二款インフレーション、第三款デフレーション、第四款スタビリゼーション、第五款國際決済銀行と國際農業抵當銀行。第五章世界經濟と日本經濟。

\* 谷口吉彦、南部誠一郎、水川透 **恐慌學說**

(經濟學全集、第一四卷、昭七・四、改造社四六判四一六頁、H20)。谷口吉彦「恐慌に關する諸學說」は緒論および本論からなり、緒論第一章恐慌事實の發展、第二章恐慌理論の發展、本論第一章過渡的恐慌の發展、第二章古典派諸學者の歴史的社會的存在と恐慌事實、第三章セイの販路說、第四章ジェームス・ミルの需給均衡說、第五章リカードの生産無限說、第六章マルサスの一般的過剩說、第七章シスモンデの所得不足說。南

部誠一郎「マルクス恐慌論序說」は第一章マルクス説の輪廓、第二章最近恐慌說批評からなる。「この小論は、最初の計劃からいへば、マルクス以後彼の恐慌理論を繞つて左翼陣營の内外に行はれたる理論的討議の跡を辿り、……マルクス恐慌論の横顔なりとも描き出さうと」したのであるが、都合により第一章につづく「各章をなすツガン・バラノウスキー(併せてカウツキー、パウエル、ヒルファディング等)、ローザ・ルクセンブルク(併せてブハーリン等)を全部放棄し、僅かに末章を成すグロスマンをこれも取急ぎ書き加へて、全く辻褄の合はぬまゝ世に出すことにした。」(著者序文)。

水川透「恐慌と金問題」國際聯盟全委員會中間報告を中心に「は第一章序、第二章「金の不足」、第三章「金の偏在」、第四章結語からなる。たしかに「辻褄」があつてゐない。

\* 向坂逸郎、樺田民藏 **資本論體系上**(經濟學全集第十卷七八、改造社、四六判三九四頁、H20)。

單行の一冊としてみれば、内容のつりあひがとれてゐない。全集の一冊としてみても、編纂の仕方は奇妙すぎるやうにおもはれる。内容の實際はつぎのやうにな

## 經濟學・經濟學史

つてゐる。資本論体系（三一・二七八頁）の執筆者は向坂逸郎氏のみ、ほかに、「通貨原理に關するマルクスの書簡」（二七九—二八九頁）と題する櫛田民藏氏の論文があり、さらに附録に「轉形期の經濟問題」（二九九—三九四頁）がある。執筆者岩城忠一氏の名は著者名として表面にあらはれてをらぬ。（同氏は京都帝國大學卒業、「河上・河田兩博士の指導」を受けた。和歌山高商教授。「ゴトキン財産論」「ボルシエヴィズム評論」（マウトナー）等の譯書がある。）この一冊が、なぜこのやうな形をとつたかについては、なんらの説明もない。櫛田氏の論文は「一八五一年二月三日附エンゲルス宛、バルンシュタイン版マルクス・エンゲルス往復書翰集第一卷、頁二二九」（改造社版マル・エン全集第十七冊一四三頁以下）のマルクスの書簡一通を紹介したものである。その紹介は、それに「ふくまるゝ説例が、マルクス貨幣理論と決定的に對立する貨幣數量説に對する批判的研究の一資料たるため」にくはだてられた。岩城氏の著作は、實踐において「殆ど無」であつた獨・塊社會化運動の「潮が引いた後の渚に残つた無數の貝殻」たる文獻的遺産を、「社會民主主義者の所説を中心として」一二の問題について整理したものであり、「批判よりもむしろ記述」を旨とする。全篇が三章からなる。第一章序説、第二章社會化における賠償問題、第三章社會化と國有化。第二章が主題であるとみていい。記述は簡潔で、いきいきしてゐる。向坂逸郎氏の著作は六章からなる。第一章「資本論」の成立、第二章商品、第三章交換過程、第四章貨幣又は單純なる流通、第五章貨幣の資本化、第六章剩餘價値の生産。この全集の第一卷河上肇著「經濟學大綱」（上篇「資本家的社會の解剖」）は、事實において、マルクス資本論全三卷にわたる講述であり、おなじく第八卷河上肇著「マルクス主義經濟學の基礎理論」（下篇「マルクス主義經濟學の出發點」）は、マルクス資本論第一卷第一篇第一、二章のみの、より詳細な講述である。すでに、それだけでも重複はまぬかれないが、向坂氏の講述は、またもマルクス資本論第一卷第一篇第一章から出發する。そして、この一冊ではそれが第一卷第四篇第十章でできてゐる。さきに河上博士は「出發點」をあた

## 一二六

へ、「これ以上の諸問題については、これを本全集中における他の執筆諸君に譲り、私自身の責任に屬する部分は、以上をもつて完結したものとす」（前掲第八卷六四四頁）とむすばれてゐるけれども、マルクス學者のあひだに執筆分擔上のうちあはせは存在しなかつたものとみえる。向坂氏の講述の特色は、一般學者ないしマルクス批判者への批判が、啓蒙的な調子で、こころみられてゐることである。ボエーム・バヴェルクのマルクス批判、および、それに近似する日本學者の諸批判がとりあげられ、山崎覺次郎博士の貨幣論が批判されてゐる等々。ちなみに、この全集の第十二卷「資本論體系下」は、資本論第三卷の解説であり、おなじ人によつて擔當執筆され、すでに昭和六年三月に刊行されてゐる。おなじく、その「中」（全集第十一卷）は宇野弘藏、山田盛太郎の兩氏によつて、資本論第二卷が解説されたもの、昭和六年十月に刊行されてゐる。

有澤廣己 **日本經濟統計圖表**（經濟學全集第三四卷中下、昭七・七九、改造社、四六判、中五二二頁、下四九八頁）著者の序にいふ、「本書

は昭和四年現在の日本經濟の機構を主として圖表をもつて明にしようと試みたものである。謂はゞ日本經濟の一個の横斷面を描かんと試みである。」この勞作の完成には、相原茂、有澤幸夫兩氏の「援助」が多であつたとのべられてゐる。全體が五章からなりたつ。第一章本書の構造、第二章人口と土地、第三章工業生産及生産事情（以上第三四卷<sup>(4)</sup>）、第四章鑛業生産及生産事情、第五章農業生産及生産事情。附録第一官營工場概観、同第二原始諸産業、同第三昭和四・五年度生産比較。（以上第三四卷<sup>(5)</sup>）——横斷面の時點が、昭和五年でなく昭和四年にとられたわけは、「一方には帝國主義時代における日本經濟の面貌を幾分でも明にすると共に、他方、昭和五年から世界には激烈な恐慌過程が進行し、日本もまた多年懸案の金解禁をもつて瞬く間に世界恐慌の渦巻の中に巻き込まれたことに據る。なぜなれば、恐慌は資本主義にとつてはその發展の内蔵する必然惡であるといへ、やはり惡たることに變りはなく、従つて資本主義の『大いさ』は異常に滅殺されて現はれ、それをそのまゝ正常な『大

いさ』として圖表をもつて表示するときに、資本主義の『大いさ』を過少評價する惡結果を招く恐れがあるからである」（四頁）また、經濟の横斷面は、平面圖でなく、「建築設計圖の如く、主体圖として」構成され、讀者のあたみに、經濟社會構成が一つの「組織」として現されるやうに、圖表をくみだてねばならぬ。それは困難なる課題である。その困難は……本質的には圖表の系統的な配置編成と記述の方法に關する。従つてその困難は經濟機構の理解——分析と綜合——に關し、畢竟、經濟學（圖表は原文のまゝ）の方法上の困難に歸着する。」この困難な課題を遂行するうへに、著者の導きの糸となつたもの、すなはち、この書物をつらぬいてゐると著者みづからいふところの原理は、マルクスの經濟學批判序説の「三、經濟學の方法」のなかにしめされた辯證法的な原理である（六七頁）。この方法によらないでは、經濟を全体的な關聯において理解することはのぞみがたい。たとへば、矢野恒太・白崎亨一共編「日本國勢圖繪」は、網羅的に詳密で、しかも圖表的描寫がきはめて巧妙だが、みぎにい

ふ方法を缺いてゐるために、「單なる資料」となつてゐる。そこで、著者はこの書物で「平素懷いてゐた意圖を幾分なりとも實行し、一つの大膽な試みを果してみたい」のだといつてゐる。同時に、適當な統計材料がそろつてゐないために、圖表をもつて經濟機構をえがくにあたり、「屢々重要な支柱を据ゑることをえず、樞要なる梁材を缺くことゝなるのは、免れがたいところ」だとも、ことはつてゐる。だが、將來において、おなじ方法にもとづき、「再び第二の試みを果しうる機會」をえたいとのべてゐる。著者のところからの抱負であらう。

\*大森義太郎 唯物史觀（經濟學全集第四八卷 昭七・一二、改造社、四六四—四六六頁）<sup>(6)</sup> いちど「史的唯物論」（現代史學大系講座）としてあらはされたものの訂正増補改題である。附録として、一、デボーリンのカント批評、二、ヘーゲルとレーニニズム、三、唯物論の旗のもとに、四、唯物史觀の防衛のために、と題する四つの論文がある。本論を補足するにやくだつものだ。「第一のものはカント哲學、これとマルクシズムの哲學との差異に關して、第二のものはヘー

## 經濟學・經濟學史

ゲル哲学、これとマルクス・エンゲルスの理論の展開としてのレーニンの哲學的見解との關聯について、第三のものは唯物論的辯證法的なる認識論の最も根本的な點の開明のひとつの試みとして、最後のものは特に唯物史觀の諸側面を、主内容の體系的なるのに對してこゝでは爭論的に、明かにしたものとして」(はしがき) 著者はこの一冊で「唯物史觀に關するかなり包摂的な廣汎な、ひとつのまとまつた著述を試みる」はずだったが、問題の困難と不健康とのために、それをはたしえなかったといひ、そのしごとの希望を明日にかけてゐる。本論の配列は、序論、辯證法的唯物論(唯物論I 哲學における二つの陣營、唯物論の一般の意味、II 觀念論の諸形態とその批評、III 舊唯物論と辯證法的唯物論の境界、IV 認識論の基準としての實踐、辯證法、I 辯證法の一般的意義、II 辯證法論理の契機) 史的唯物論(I 生産力と生産關係、II 史的唯物論の種々なる定式化、III 上層建築論、IV 階級構成および階級闘争の理論) となつてゐる。ふせ字はごくわずかだ。史的唯物論の第一項生産力と生産關係などは、マルク

ス經濟學の全體系にたいして關心のとおしい「理論經濟學者」にとつても、いやおういはずぬ問題にみちたものだ。この一冊は、この全集のなかでも、とりわけ力のはいつた著作のひとつにかぞへられよう。著者は、大正十四年政治研究會にくはり、無産政黨組織の問題に關して、市川正一、佐野文夫氏らのいはゆる原案派にたいし、鈴木茂三郎、黒田壽男氏らの修正案派に加擔した。大正十五年三月、鈴木、黒田氏らと「大衆」を創刊し、「所謂福本イズムの漸く擡頭し來れるに遭ひ、柄鑒不相容、之と挺争す。」昭和二年十二月、山川均、荒畑寒村、猪俣津南雄氏らと「勞農」を創刊し、「先の福本イズムの延長としての我邦左翼の極左的誤謬と執拗に闘争す。」いま「前進」の同人(巻末の年譜による)これら事情を知ることには、このたびの著作の理解には、いふ必要であるにかゝらず、讀者はかならずしも著者みづからの手になる「年譜」に接しうるとかぎらない。この全集が執筆者の年譜をそへたのはいいことである。

\* 農政と經濟 高岡熊雄先生在職卅五年記

## 一二八

念論文集 (昭七・二、北海道帝國大學農學部經濟學教授 渡邊侃、菊判八〇頁、昭和七) 二十三

篇をおさめてゐる。なかに、手塚壽郎「ブルードンの所有權」、高橋次郎「ウエストの地代論」、南亮三郎「農業に於ける資本主義的發展過程」、早川三代治「我國耕地の分配狀態」、東畑精一「農業恐慌理論に於ける自然の問題」、渡邊侃「需要供給の弾力性より導出せる經濟循環の一理論」、鹿討豐雄「初期英國農業書に現はれたる經濟思想」、松田武雄「農業段階序説」の諸作をふくむ。

\* 堀經夫 經濟學史要論 (第二分冊、正統學源中

昭七・九、弘文堂、菊判、序文二頁、本文二〇九一九四頁(通し頁)、昭和七 第一分冊は一九三一年六月の發行)。「各種の經濟學派に屬する多數の學者の思想と學說との要点を派別に又群別に分冊の形で順次講述せんとするもの」(第一分冊序文)であるといふから、完成のあかつきには近代經濟學史の一大勞作をわが學界がもつこととなるであらう。この著者に「リカードウの價值論及其批判史」(一九二九年)がある。直接本原の諸文獻にあつて「獨創的解釋」をくはだてるといふ態度は、この書物にも共通のものであると



みていゝ。「聴講者の筆記の勞と時とを省き、以て興味ある問題に對して一層詳しい説明を加ふるの餘裕を得んことを目的として、印刷に附せられたものであるから、個々の學者、思想、又は學說について説く所は極めて簡單である（同上）」といふのをみれば、いはゆる講義のプリントとして、特殊な目的のためのもので、一般讀者のためには不便なものに想像されるけれども、事實はすこしもさうでない。この第二分冊は第三章にあてられたものの約三分の一であり、第三分冊でジョン・ステュアート・ミルと、かれ以後の正統派學者におよび、それで正統學派全体をむすぶつもりだといふ。「比較的」に著名ならざる諸學者のために割合に多くの頁數を費すことは、……從來これ等の學者については殆ど紹介がなされてゐないばかりでなく、亦これ等の學者を取扱ふことそれ自体は、學史的に興味があると共に、實は側面より、スミス、マルサス、リカードウの如き偉大なる學者の思想なり學說なりを眺め、之を一層顯著に浮出さしめることにもなるのである。——彼等が如何にこれ等の建設者達の思想や學說を中心

として論議をなしたかを觀れば、蓋し思半ばに過ぐるものがあらう。又彼等は次の時代にミル、マアシャルなどの如き偉大なる集大成を出現せしむるための礎石の役目を果たしたのである。」(第二分冊序文、本文二一〇・二二一頁も參照) 著者は三十餘名の學者を「便宜上の標準に基いて」、(1)英國の重農主義者、(2)スミスの評註者及び承繼者、(3)差益地代説の創唱者、(4)リカードウの承繼者、(5)マルサスの承繼者、(6)女流經濟學者、(7)主觀學派の先驅者、(8)オクスフォード大學教授、(9)「分配論」筆者の九群にわける。この書物の目的上、「反資本主義經濟學を説く者」は除外されてゐる。反資本主義的であることが、すなはち「正統派」でないとの解釋は、用語の問題であるから、とふにおよばないとして、「正統派」以後のイギリス經濟學史のみならず、「正統派」以外のイギリス經濟學史も、もちろんこの著者に期待されべきである。河上肇博士の經濟學史上の勞作には、完成されたものとして、「資本家的經濟學の發展」(經濟學大綱下篇、一九二八年)がある。「資本主義經濟學の史的發展」(一九二三年)の改

訂改題されたものだ。その河上博士の學史にくらべると、この書物は、日本の經濟學研究の水準が、過去十年のあひだにどのくらゐたかめられてゐるかをしめすものだ。さきに兩者が師弟の關係にあり、經濟學史研究の方法と記述の仕方においても、兩者に違いへだたりがないだけに、この水準の變化はいさう自然に讀者の目にうつらざるをえない。

\* 高橋誠一郎 重商主義經濟學說研究(昭七・

一一、改造社、菊判(一〇七頁) 序文にいふ、著者は「明治四十四年、歐洲留學の頃より經濟學成立以前に於ける歐洲經濟思想研究資料の蒐集に従事し、……抄譯拔錄せる手稿の次第に堆きを覺えたるが、「前記手稿に若干の添削を加へて」逐次三田學會雜誌によせ、大正九年同誌所載の諸篇を收輯して、「經濟學史研究」を出版した。その増訂版は大正十二年關東大地震のために出づべくしていでず、昭和四年改造社版經濟學全集の一卷として「經濟學前史」をあらはすにおよび、「其の第三篇近世の部に於いて、近世經濟思想の黎明期たる所謂重商主義時代の諸學說を叙述したるが」一頁

數に制限があつて十分に説きつくしえなかつた。著者が重商主義經濟學說の研究をこゝろがしてから「二十二年を経過する」といふが、「茲に前記の舊著並びに其の後に執筆して三田學會雜誌に登載したる舊稿を補綴」してつたものが、この書である。

「余は能ふ限り本原の資料に據り、此の時代の經濟思想及び學說を紹介せんことを努めたるも、力及ばずして、後世諸學者の引用を借用せるもの亦少なからず。」日本の學界における稀有の大作である。全卷が緒言および七篇からなりたつ。第一篇貿易論、第一章ブリオニズムとマーカンチリズム、第二章特殊貿易平衡論と一般貿易平衡論、第三章貿易平衡論の倒壊、第二篇貨幣及び價格學說、第一章第十六世紀の貨幣論、第二章第十七世紀の效用價值説と勞働價值説(一)競争價格は認の傾向、(二)トーマス・ホッブズの正價值排斥とウィリアム・ペチの勞働價值説、(三)ニコラス・バーボンの第三章英國に於ける貨幣改鑄によりて喚起せられたる貨幣論争、第四章貨幣定量説、第五章土地證券貨幣論及び費用價值學說の發展、第三篇利子論、第一章中世的微利禁止意見

よりの解放、第二章利率法定論争、第三章所謂「自由貿易論者」の利子學說、第四章自然利率論、第四篇人口學說、第一章人口過多の危惧と人口減退の恐怖、第二章人口統計の先驅、第三章國富と人口、第四章人口對食料及び職業の問題、第五篇勞働及賃銀論、第一章近世初期の失業問題、第二章授産所の設立による貧民の就業、第三章會社組織を以つてする勞働搾取案、第四章勞働強制權、第五章生存費賃銀説、第六篇社會思想、第一章農民一擧、第二章「ユートピア」、第三章構圖の問題、第四章「新アトランチス」「日の國」及びドイツガ運動、第五章「レヴィアサン」と「オセアナ」、第六章私有財産は認論、第七篇政治算術と倫理哲學、第一章政治算術、第二章實證的經濟論の典型、第三章倫理哲學。——索引(一二頁)は人名にかぎられてゐる。日本學者の名はひとつもみえない。つまり、日本の學界における自己封鎖の著作であるといへよう。引用書に邦譯のあるばあひでも、著者はそれにふれてゐない。たとへば、Wilhelm Roscher: Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre, 1851

は「高度の希臘書」であり、しかもその邦譯は「唯一最初の外國語譯本」として學界にあたへられてゐる。譯者杉本榮一教授はなみだぐましいまで、ゆきとゞいた用意をもつて、その翻譯を完成してゐるのである。しかるに、その「ロツシャー英國經濟學史論(一九二九年、同文館)」は高橋教授の著作に引照されてゐない。これはかりに一例をあけたにすぎない。だが、かゝる著者の態度は科學的作業の領域におけるひろい協同性を無視するものとして、非難にあたひするかもしれない。すくなくとも日本の一般讀者が、本書から當然うけうべき利益の一部分を、うっかりとりにがすのを救ひえないであらう。日本語でかかれ、そして日本人によませるために出版される學術上の作品は、高橋教授の高貴な自己封鎖的態度を模範としてはならぬ。文體が文語體であることなどは、この点にくらべれば、かゝる問題であらう。

山本勝市 經濟計算 — 計劃經濟の基本問題 — (昭七・九、千倉書房、四六判二九八頁、昭和七) 經濟理論について正しい興味をもつすべての研究家は、この書物をみのがしてなるま

い。わけでも價值論に興味をもつひとびとは、おのれの理論的訓練を試験する意味で、この書物を通讀することがきはめて有益であることをみいだすにちがひない。經濟學上、價值論がしばしば學問的存在の意義をうたがはれてゐる時代において、その絶對的必要が意外の方面から證明されてきてゐるといふことは、皮肉以上である。勞働價值説および限界利用説の理論によつて、十分頭腦をきたへられたひとびとは、同時に、經濟一般の本質的諸規定の性質を理解してゐるはずであるが、その理解をもつて、計劃經濟における計算單位の問題を考察することは、これまでの抽象的世界の牢獄をつきやぶつて、いける現實世界の活問題に當面することとなる。交換經濟はその計算單位として貨幣をもち、社會經濟の全体的均衡——全需給の合理的適合——は、價格機構をとほして自動的に實現される。しかるに、計劃經濟は計算單位としてかりに依然貨幣をもつとしても、價格機構をもたないのであるから、間斷なき需給の自動調節といふことは、いふべくして微妙にはおこなはれがたい。計劃經濟はこのか

## 經濟學・經濟學史

んじんな機能を社會經濟から排除するものであるから、「經濟」そのものの合理性はたかめられないのみか、逆に滅却されざるをえないといふのが、著者の根本思想のやうである。(1)計劃經濟においては經濟計算の單位は必要なりやいなや、(2)必要なりとして、何がその單位として、もとも安常なりや、といふ問題は、明日の問題である。だが、ロシアにとつては今日の問題である。いはゆる「經濟計算」の問題が、やかましくドイツ學者のあひだに論議されはじめたのは、たんなる理論的興味からおこつたことではなくて、政治經濟の實踐の必要から、ロシアにおける經驗から、生じたことである。この問題にたいする諸學者の解答は、つまるところ、これまでの經濟價值論および貨幣論上の習練の科學的な知慧くらべであり、その理論の内面的訓練において、ぬかつてゐたものは、それをのこらず暴露するといふ結果になつたのである。著者は再度の遊戯によつて、ひろくこの問題に關する文献をあつめ、十分の準備において、これを日本に紹介するの勞をとられたのであるが、問題そのものと關係文献とを、かく

も整然たるかたちにおいて學界に紹介されたことは、立派な貢獻であるといはなければならない。「奔流の如き社會主義計劃經濟への動きに、一步をあやまらんか帝國日本の破局來らん。將に雨到らんとして風堂にみつるもの、微力も顧みるに暇あらず、默せんとするも亦能はざるにあらずや(自序)」といふことばにみるごとく、著者には憂國の志士たるおもかけがみられると同時に、經濟の理論的問題にながく沈潜されるほどの科學的執拗性のみとめられることは、わけでも尊敬にあたひするところだとおもふ。たゞ自己の結論をいそぐのあまり、計劃經濟の可能な條件にたいする慎重綿密な考察をおこたつてゐるきらひがみえるのみでなく、讀者をして現實の交換經濟における貨幣および價格の機能を、あたらしい光のもとに再認識せしめるだけの勞ををしんでゐるきらひもある。第一、計算單位といふものの概念が出發点で説かれてゐるのだければ、一般讀者が問題の展開にしたがつていつてゆけるかどうか疑問ではないか？ それにしても、これだけのまとまつた研究が、手ごろな一冊として學界

經濟學·經濟學史

におくられたことは喜びにたへない。宮田喜代藏教授がいちやく二三の新聞紙上に紹介の勞をとられてゐるのは、まことに理由のあることである。つきにその目次をかかげる。第一章問題の意義、(一)經濟と經濟計算、(二)資本主義的交換經濟に於ける經濟計算、(三)社會主義的計畫經濟に於ける經濟計算の必要、(四)社會主義計畫經濟に於ける經濟計算を研究することの重要性、(五)本問題に對する學者の關心、第二章本問題研究の史的概観、(一)主要なる文獻、(二)主要なる文獻、(三)主要なる文獻、第三章實物、物、計算を行はんとする見解、(一)ノイラートの見解とそれに對する批判、(一)ノイラートの見解、(二)ノイラートの見解に對する批判、(二)チャヤノフの見解とそれに對する批判、(一)チャヤノフの見解、(二)チャヤノフの見解に對する批判、第四章勞働價值計算に、よらんとする見解、(一)ヴァルガの見解とそれに對する批判、(一)ヴァルガの見解、(二)ヴァルガに對する批判、(二)ストルミリンの見解とそれに對する批判、(一)ストルミリンの見解、(二)ストルミリンの見解に對する批判、(三)ライヒターの見解と其の批判、

一、ライヒターの見解、二、ライヒターの見解に對する批判、第五章貨幣計算によらんとする見解、(一)カウツキーの見解とそれに対する批判、一、カウツキーの見解、二、カウツキーの見解に對する批判、(二)ハイマンの見解とそれに對する批判、一、ハイマンの見解、二、ハイマンの見解に對する批判、第六章經濟計算を全然不可能とする見解、(一)ミーゼスの見解とその批判、(二)ハルムの見解とそれに對する批判、第七章結び、私見の概括、(一)理論的觀察、(二)ロシアに於ける經驗の吟味。著者はさきに和歌山高商教授、現に國民精神文化研究所員。別に社會主義批判の著書もあるよし。この書物だけでは、著者自身の經濟思想は大體自由主義的であるといふ輪廓よりほか、ふか

くはわからない。

鍵本博譯、バラノウスキー 英國恐慌史論  
 (昭七・二 日本評論社、菊到四六七頁、硬紙)。索  
 引なし。原著は「英國における産業恐慌」  
 と題し、一八九四年ロシア語で出版された  
 もの。佛譯(一九一三年)を底本としてゐる  
 もの。恐慌理論における原著者の地位を「近  
 代的恐慌理論の父」と評したゾンバルトの

ことばを譯者はひいてゐる。「ツガン・バラ  
ノウスキーの恐慌理論は、恐慌の一般的條  
件或は要因に關する説明の方面から見れば、  
部分的過剰生産説であり、恐慌の直接原因  
或は誘引に關しては資本缺乏説である。資  
本缺乏説はその後シュビートホッフ、ボー  
レ、エーレンベルグ、シュモラー、レキ  
シス、レスキュール、カッセル等……によつ  
て全部或は一部採用せられ、今日有力な見  
解の一となつてゐる。しかるに部分的過剰  
生産説或は社會的生産配分不均説は、資  
本主義産業の跋扈ひいては資本主義崩壞の  
問題を含み、カウツキー、ヒルファデー  
ング、ローザ・ルクセンブルク、ブハーリ  
ン等の峻烈な批判を受けた。……本書に於  
ける實證的研究、豊富な基礎的資料を巧み  
に用いた恐慌史の叙述や、史實から出發し  
た歸納的な産業變動理論や、興味ある視角  
よりせる國民生活及失業者運動の叙説など  
は、それだけでも大きい意義をもつものだ  
と思はれる。」(譯者序文)「この著作は、産  
業循環、週期的産業恐慌——現代經濟生活  
に於ける最大の謎であり、科學が未だ説明  
せざる現象——の研究に充てたものであ

る。……私は事實の研究から出發して、一つの新しい恐慌理論に到着した。それは、私の考によれば、古典經濟學說と資本論第二卷に於けるマルクスの所論との綜合である。……私は英國における恐慌の歴史を英國の議會報告書によつて叙述し、この事實に附加するに當問題の理論的研究を以てしようと努めた。同時に私の研究範圍を恐慌の社會的影響にまで擴張するのが適當だと信じた。産業恐慌は英國の社會生活において最も重要な要素であるから、恐慌が英國労働者階級の最重要な政治的社會的運動に及ぼした影響を分析するのは有益なことと思はれたのである。」(フランス版著者序文) 全卷を三篇にわけてある。第一篇恐慌の歴史、第一章十九世紀の第二四半期以後に於ける英國産業發達の概観、第二章一八二五年より一八五〇年に至るまでの諸恐慌(一八二五、一八三六、一八三九、一八四七年の恐慌)、第三章一八五〇年より一八七〇年に至るまでの諸恐慌(一八五七、一八六四、一八六六年の恐慌)、第四章十九世紀末數十年間に於ける週期的産業變動(一八九三年の恐慌、一八八〇—一八九〇年の不景

氣、ベアリングの崩壊及一八九〇年—一九〇〇年の不景氣)、第五章最近十年間に於ける英國産業の週期的變動。第二篇恐慌の理論、第一章販路の理論、第二章各種の恐慌理論、第三章産業循環及恐慌の週期的性の説明。第三篇産業恐慌の社會的影響、第一章産業循環が國民生活に及ぼす影響、第二章一八二五年より一八五〇年に至るまでの労働者大衆の失業及革命運動、第三章棉花飢饉、第四章一八七〇—一九〇〇年に於ける失業及失業者運動、第五章現代失業の一般的性質。

\* 森谷克己譯、ボロック ソヴェト聯邦計劃經濟史論(昭七二、同人社、菊判五二〇頁、文獻目録原本のまゝ一三頁、翻表そのほか一四頁、

註三〇) 原著者は「戦後ドイツの青年マルキシスト運動(一九一九年—一九三三年)におけるマルキシスト學徒として現はれ、その後フランクフルトの Institut für Sozialforschung が設立(一九三三年)されるに及んで、グロスマンはボーランドから、彼やウィットフォートゲルはさきの青年マルキシストの中から此處にやつて來、研究所員となり、現在ではカール・グリュンペルヒ

の後を襲つて所長となつたホルクハイマー教授の下でグロスマンと共に活動して居る。……彼はファシズムの攻撃が始まる以前、一九二九年、フランクフルト大學講師にも就任し得、今日に及んでゐる。(同年十月、その二時間に亘つての就任演説は、マルキシズムに基くシュパン批判であつた由)。……かれが初めの著作は、『ソンバルトのマルキシズム反駁』(Pollock, Sonbarts Widerlegung des Marxismus, 1926)であり、ゾンバルトの著書「プロレタリア社會主義(マルキシズム)」を批判してゐる。本書は第二作。もともと經濟學の領域では、價值論、貨幣論を専攻し、H. Block の「マルクスの貨幣理論」(大野純一教授の邦譯があらはれてゐる)にたいする批判は、さきに「我等」(一〇ノ一〇)に篤信太郎氏によつて紹介された。著者は「確かに、實踐家でないことのため、その理論的立場にも一定の限界を設けられてゐる……が併し、彼は、根本的迫力と客觀性への獻身的努力とによつて科學性への熱意を示してゐる。實際、彼は、本書を成すに際しても、ロシアの學界と不斷の相互的連絡を保つてゐたの

## 經濟學・經濟學史

みならず、「ソヴィエト聯邦を訪ね、その地で廣汎な資料を蒐集し、徹底的に研究し、且つまた親しく著名な計劃および經濟關係の活動家達と會見もして彼等との會話からも汲みとつた」(ワインシュタイン)のである。本書は、カール・グリューンベルヒ教授編輯、フランクフルト大學社會科學研究所叢書第二篇 F. Pollock, Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowjetunion, 1927の全譯。「一九一七年—一九二七年」のソヴィエト聯邦における計劃經濟の企圖の歴史、諸方法および諸結果に關する記述である。……このテーマに關する比較的大なる學術的勞作は、私の知るかぎり、今日まで西歐の國語においてもロシア語においても存しない。〔著者序文〕邦譯者がこの書物を日本に紹介しようとする眞摯なこころしは「譯者序言」(一〇頁)にあふれてゐる。とともに、原著者が「その論述の多くの箇所では労働者階級の權力擁護のための政治的闘争の根本的意義を理解してゐない」といふ一点を指摘したインプレコールの批評を紹介することを、ためらつてゐない。ロシア學者の批評を紹介して、つぎのやうにも述

べてゐる。「ワインシュタイン教授 (Prof. Al. Winstein, Moskau) も、個々の點については、若干の不滿を述べてゐる。——例へば、市場なき貨幣なき社會主義經濟の建設といふことから直ちに生ずる理論的諸問題のうち、經濟計算の問題が、ポロツクの書物では闡明されてゐないといふこと、即ちポロツクは、一九一九年—一九二一年のソ聯邦經濟學界において、労働支出の單位を以て經濟計算の單位の基礎となすべしと提議をめぐつて、かなり廣範圍に互り行はれた討論に觸れてをらないのみか、社會主義的經濟計算の問題に特に一章を當ててゐるところのし・ユーロフスキーの著作を眼に留めてさへもゐないといふこと、この點は遺憾とすべきである。」全卷が六章からなつてゐる。第一章一九〇五年から十月革命に至るまでのロシアの經濟、第二章謂はゆる戰時共產主義、第三章新經濟政策(ネップ)——主要諸段階の概観、第四章新經濟政策(ネップ)——國營工業組織、第五章新經濟政策(ネップ)——國家計劃委員會(ゴスプラ)とその事業、第六章暫定的諸結果。翻譯にあつて、指導的地位にゐた人が、平

野義太郎氏であることが「譯者序言」にみえる。原著が、日本學者に利用された例は、小泉信三教授向井鹿松教授等の論策にみられる。一九三二年度の單行翻譯書中、意義おほいなるもののひとつ。

\* 有澤廣己・森谷亮己共譯、(ヘンリー・グロースマン) 資本の蓄積並に崩壞の理論 (昭

七・三、改造社、菊判譯者序言四頁、日本版へ原著者序言五頁、緒言一八頁、本文八〇四頁、人名索引八頁、口緒寶真(原著原、日本版への原著者序言のマヌスクリプトの一部)三葉。\* 500) 原著の表題はくはしくは「資本主義制度の蓄積並に崩壞の法則、併せて一の恐慌理論」Henryk Grossmann: Das Akkumulations- und Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems (zugleich eine Krisentheorie) 1929である。前項ポロツクの著作とおなじ義書の一編である。ひとたび原著があらはれると、これにたして忽ちおこつた批判の多くは、主として第三インターナショナルのはからきた。さきのローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論にたいする批判が第二インターナショナルのがはからおこつたのと好箇の對照である。著者は日本版への序文で、

つぎのやうにいつてゐる。「マルクスの方法についての決定的な叙述は、目下私が執筆中の本書第二巻に於いて初めて與へられるであらう。この二巻に於いて私が携はる問題は、マルクス主義諸文献にあつて從來全く等閑に附せられてゐたところの、單純、生産の問題である。何故この問題を取扱ふかといへば、資本家的再生産行程の理解に對する最大の難關はマルクスの見解による」とまさに單純再生産の叙述に至る、といふのがその理由である。すなはちグロスマンの著作は完結してゐないのだ。「本書はマルクス理論に基いて資本主義の發展諸傾向を論ぜんとする更に大きな一著作の……一部分である」(一一頁) まづ、資本主義の没落に關する從來の諸學者(シスモンディ、R・ジョーンズ、J・B・クラーク、A・マーシャル、K・デイル、K・マルクス、E・ペルンシュタイン、K・カウツキー、R・ルクセンブルク、G・エックシュタイン)の説を述べ、これまでの文献における崩壊思想のあとをたづね(G・シムコヴィッチ、W・ゾムバルト、A・シュピートホフ、G・ソレル、T・マサリーク、I・シュンペーター、R・ミ

ヘルス、H・クノー、A・プラウンター、N・ブーハリン、G・カラソフ、ブーディン、ツガンリバラノウスキー、O・パウエル、R・ヒルフェーディング、L・ミーゼス、P・ヘルムペルヒ)とくにカウツキーによるマルクス理論の放棄を批判し、それをもつて第一章ををる。全巻を三章にわけ、第二章崩壊法則、第三章修正作用をなす、反對諸傾向(抽象理論的分析の資本主義現實の具體的諸現象に當つての驗證)とする。第三章を第一部(國內市場、資本主義諸國の機構の内部的構造の諸變化による収益性の恢復)、第二部(世界市場、世界市場の支配による収益性の恢復、帝國主義の經濟的機能)にわけ、翻譯は有澤、森谷兩譯者が分擔し、譯文の統一には佐山清氏があたられてゐる。原著者と交友關係にある平野義太郎氏の配慮にもとづいてところがある。解題者はこの書物を手にすることがおくれたため、目次の一部を抄出するにとどめなければならぬのを遺憾とする。ポロツクの書も、この譯書も、ともに森谷克己氏の勞により、また平野義太郎氏の配慮によるところのやうであるが、かういふ二大作を比

較的みじかい期間に邦譯して、學界に寄與された功績は看過されてなるまい。

\* **マルクス・エンゲルス全集** 第一六卷ノ二(昭七二、改造社、四六判四二四頁) 口繪、晩年のマルクス夫人の小影、譯の擔當者は島海駕助、木岡文雄、塚本三吉、羽田貞一の四氏。新

ライン新聞からの論文七十四篇をあつめた。この新聞は、三月革命のあとで、マルクスとエンゲルスがケルンではじめたもの。一八四八年六月一日から四九年六月十九日までつづいた。「當時の民主主義的運動の内部においてプロレタリアートの立場を、しかもすでに一八四八年のバリの六月叛亂者にたいするその徹底的なる支持——このことはこの新聞からその殆ど全株主を離反せしめた——によって、代表した唯一の新聞であつた」(エンゲルス)

\* **マルクス・エンゲルス全集** 第二五卷(昭七

五、改造社、四六判四三三頁) 口繪「ドイツ帝國議會におけるプロシアの火酒」の掲載された「フォルクス・シュタート」第二十三號、譯の擔當者は日下部良治、長野兼一郎、羽田貞一、岡田宗司、阿部得二、安岡時夫、佐々木義章の七氏。マルクス・エンゲルス

## 經濟學・經濟學史

往復書翰集(V)(一八四六年——一八八二年)、エンゲルスあてマルクス夫人のてがみ、マルクス夫人あてエンゲルス、マルクスのがみ、プレハノフあてエンゲルスのてがみ、等々。新ライン新聞からの論文五篇、第十六卷、第十六卷ノ二からめられたものすべて。ほかに、みだしがなかばふせ字になつてゐるもの二。また、一八三七年にかゝれたマルクスの詩の大部分。(三〇三——四一三頁)ころろみに、みだしをひくと、「父にささぐる詩」「森の泉」「妖力ある堅琴(物語詩)」「かけおち(同上)」「あこかれ(民謡的物語詩)」「ベルリンでのヴァインナ猿芝居」「リッター・グルックのマルミイダ」「女中雇入れ」「感傷的なひとびと」「新流行浪漫主義」「真理の太陽に寄す」「伊達な勇士に寄す」「お向ひの妻君に」「人魚のうた」「俗人の不審」「數學者の智慧」「水中の老人(物語詩)」「醫者達に」「醫者の心理學」「醫者の人類學」「オヴィド作『悲表の書』の『第一悲歌』(マルクスのドイツ語自由詩)」「イェンニイにおける結尾の十四行詩」「狂女」「イェンニイにおける二つの唄」「花の王さま」「……に寄する對話」「世界審判(戯詩)」「兩

人の歌姫(物語詩)」「エビグラム(諷詩)」「膨らまし菓子屋の親方に宛てた結びのエビグラム」「ハアモニイ」「ひしがれし女(物語詩)」「人間の誇り」「散歩」「星に寄せる歌」「幻夢」「海上の舟人の歌」「魔の船」「貧乏めし女(物語詩)——この年、詩人マルクスは十九歳ばかり。

## \* マルクス・エンゲルス全集 第二六卷(昭七・八、改造社、四六判四二二頁) 口繪バリ・フォル

ウエルツ紙の一面、譯の擔當者は安岡時夫、佐々木義章、横川次郎、豊島義作、山口修、轟三郎の六氏。一八三七年にかゝれたマルクスの詩ののこり、——「めざめ」「暗き思ひ(情熱的頌歌)」「月神」「ルチンデ(物語詩)」「ちび人形と太鼓(童話)」。ヘーゲル辯證法及び哲學一般の批判(一八四四年——マルクス)。現象學のヘーゲルの構成(一八四五年——マルクス)。「この草案は『フオイエルバッツハに關する』十一テーゼを含んだマルクスの一八四四——四六年時代のノートブックの第十六頁に載つてゐるものだ。恐らく『神聖家族』を書いた後、まだ一八四五年二月上旬の追放を受けぬ以前にパリで書かれたものらしい。後に『ドイッチェイデ

オロギイ』となつて現れたヘーゲル及びフオイエルバッツハの批判的檢討の最初の草案であつて、フオイエルバッツハ論綱中に特殊に確定されたマルクスの觀點を一般的に表式化してをる。凡そ一八四五年一月頃書かれたものらしい。(凡例)

## \* マルクス・エンゲルス全集 第二七卷(昭七・二、改造社、四六判三五二頁、附一〇〇) ドイ

ツチ・エ・イデオロギイ(マルクス『エンゲルス——一八四五——四六年』聖マックス(續)、聖マックス補遺、ゲーテに就いて(一八四七年——マルクス『エンゲルス』E・V・ホルスタイン出のゲオルグ・クルマン博士。別名眞正社會主義の豫言(マルクス——一八四五年——四六年)、フレンケルとファルリン宛ての手紙(マルクス——一八七一年)、ドメラ・ニーヴェヒンユーズ宛ての手紙(マルクス——一八八一年)、エンゲルス・ゲーテ宛ての手紙(エンゲルス——一八八二年)、經濟學に關する手稿(マルクス——一八四四年)、『經濟學及び哲學に關する手稿』序文(マルクス——一八四四年)をふくむ。『經濟學に關する手稿は、マルクスの最初の大なる經濟學的著述』であると解説者は説いてゐる。



- \* 猪谷善一 **アジア經濟の展望** (昭七・二、千倉書房、四六判二〇八頁、 $\text{¥}150$ )
- \* 小原嘉三郎譯、ヘンダースン **物富み人富まざるの矛盾** (昭七・二、千倉書房、四六判一五三頁、 $\text{¥}100$ )
- \* 神原周平編 **日本經濟年報** 六 (昭和六年第三四半期) (昭七・二、東洋經濟新報社、四六判一九五頁、 $\text{¥}100$ )
- \* 猪岡驥一 **世界經濟圖表** (現代經濟學全集第二六卷、昭七・二、日本評論社、菊判三八三頁、 $\text{¥}110$ )
- \* 猪岡驥一 **世界經濟圖表** (現代產業叢書第八卷、昭七・二、日本評論社、菊判三八三頁、 $\text{¥}110$ )
- \* 高橋龜吉 **世界破局と日本經濟の變革** (昭七・二、千倉書房、四六判三九六頁、 $\text{¥}150$ )
- \* 中島徹三 **世界經濟の統一** (昭七・二、千倉書房、四六判一四四頁、 $\text{¥}100$ )
- \* 東京朝日新聞社經濟部編 **世界經濟の苦悩を打診す** (昭七・二、朝日新聞社、四六判二二八頁、 $\text{¥}60$ )
- \* 產業勞働調査所譯 **ソヴェート經濟及經濟政策** (昭七・二、叢文閣、菊判一八七頁、 $\text{¥}50$ )
- \* 大山岩雄譯、レーニン **ロシアに於ける資本主義の發達** 大工業のため國內市場の形成過程 (昭七・二、南北書院、菊判四七八頁、 $\text{¥}180$ )
- \* 十時彌譯、オトマン・シュパン **マルクス主義の解説及批判** (昭七・四、中興館、菊判一四六頁、 $\text{¥}120$ )
- \* 小島昌太郎譯、ワーゲマン **世界經濟機構と景氣變動** (昭七・四、雄風館、菊判四〇〇頁、 $\text{¥}300$ )
- \* 福田次郎譯、マクスアドラー **マルキシズム方法論** (改造文庫、昭七・四、改造社、菊判三七一頁、 $\text{¥}50$ )
- \* 室伏高信 **ファツシヨかマルクスか** (昭七・四、一元社、四六判二四八頁、 $\text{¥}100$ )
- \* 二本保幾 **經濟學史概論** (昭七・四、明善社、菊判三八頁、 $\text{¥}250$ )
- \* 草ヶ江二郎譯、リュシアン・ローラ **資本主義精論入門** (昭七・四、共生閣、四六判二四七頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 北澤新次郎 **經濟概論** (昭七・五、泰文社、菊判二八〇頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 直井武夫譯、リヤシチエンコ **マルクス主義農業經濟學** (昭七・五、南北書院、四六判六六一頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 井關孝雄譯、ダブリン・ロトカ **人の貨幣價值** (昭七・五、先進社、四六判三六四頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 神原周平編 **日本經濟年報** 七 (昭和六年第四四半期) (昭七・五、東洋經濟新報社、四六判三〇二頁、 $\text{¥}100$ )
- \* 產業勞働調査所譯、**サヴェート經濟及經濟政策** 二 (一九三一年第四四半期) (昭七・五、叢文閣、四六判二九三頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 福田敬太郎 **市場政策原理** (昭七・五、春陽堂、菊判四二頁、 $\text{¥}450$ )
- \* 西雅雄、田畑三四郎譯、ペーア **新版改訂社會主義通史** (上下) 二冊 (昭七・五、白揚社、四六判九一四頁、 $\text{¥}50$ )
- \* プロレタリア科學研究所 **マルクス主義の旗の本に** 改編・第一冊 (昭七・五、菊判三三六頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 松村登譯、レーニン **帝國主義論** (マルクス主義社會科學叢書第二、昭七・五、協書院、四六判二八八頁、 $\text{¥}250$ )
- \* 田中勝太郎譯、ラビンスキー **社會ファシズム論** (改造文庫、昭七・五、改造社、菊半裁二七三頁、 $\text{¥}50$ )
- \* 河津蓮 **經濟原論** (昭七・六、明善社、菊判五三三頁、 $\text{¥}300$ )
- \* 經濟批判會譯、ワリヤーシ **數字に現れた世界恐慌** (昭七・四、叢文閣、四六判三三一頁、 $\text{¥}80$ )
- \* 國際聯盟事務局東京支局 **世界經濟不況の過程並に様相** (國際聯盟經濟叢書第三冊、昭七・四、發行者は著者におなじ、森山書店發賣、菊判

## 經濟學・經濟學史

一三八

- 五五二頁、 $\text{H} 300$ )
- \* 佐原貫臣 **マージナルに據る經濟學講義** (昭七・四、寶文館、四六判四六〇頁、 $\text{H} 250$ )
- \* 鈴木久藏 **會社豫算** (産業合理化講座一〇、昭七・四、日東社、菊判九二頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 増地庸治郎編 **株式會社研究** (經營經濟研究二、昭七・四、同文館、菊判二二二頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 井藤半彌 **社會思想と近代生活** (昭七・四、同文館、四六判二二四頁、 $\text{H} 120$ )
- \* 太田黑研究所譯、レーニン **國家と革命・左翼小兒病** (レーニン主要著作集、昭七・四、新興書房、四六判一八四頁、 $\text{H} 120$ )
- \* プロレタリア科學研究所 **マルクス主義勞働者教程** (經濟學第五分冊、昭七・二、叢文閣、四六・七九頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 蒔田耕三譯、ウリヤーノフ **マルクス地代論について** (昭七・二、共生閣、四六判一二三頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 竹原八郎譯、ウエーバー **資本主義の終末?** (昭七・二、日本評論社、四六・一五七頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 櫻井誠之譯、カール・デール **資本主義の法律的基礎** (社會文庫、昭七・二、日本評論社、四六判一〇二頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 藤川宏譯、チスカ **經濟生活の社會化** (社會文庫、(昭七・二、日本評論社、四六判一〇八頁、 $\text{H} 55$ )
- \* 太田黑研究所譯、マルクス・エンゲルス **共產黨宣言** (昭七・二、河西書店、四六判三九二頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 日本新聞編輯局 **共產黨の正體と撲滅策** (昭七・三、先進社、四六判一三六頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 山崎覺次郎 全訂改版 **經濟原論** (昭七・三、有斐閣、菊判三三九頁、 $\text{H} 500$ )
- \* 吉田秀雄譯、リカアドウ **經濟學及課税の諸原理** (世界大思想全集第六三卷、昭七・三、春秋社、四六判四七二頁)
- \* 那須皓、東畑精一 **協同組合と農業問題** (經濟學全集第一七卷、昭七・三、改造社、四六判四七四頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 經濟批判會譯、ザアルガ **世界經濟年報** 一五 (昭七・三、叢文閣、四六判一五九頁、 $\text{H} 70$ )
- \* プロレタリア科學研究所譯 **マルクス主義勞働者教程** (經濟學・六、昭七・三、叢文閣、四六判七一頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 住谷悅治、阪本勝、松澤兼人共譯、ホブソン **近代資本主義發達史論** (上下卷、改造文庫、昭七・四・六、改造社、菊半裁上卷三七六頁、下卷四二二頁、索引八三頁、上卷  $\text{H} 50$ 、下卷  $\text{H} 50$ )
- \* 經濟批判會譯 **アメリカ資本主義の諸問題** (世界經濟叢書七、昭七・六、叢文閣、四六判四三六頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 東亞經濟調查局 **統制經濟に關する資料** — フォシスト政府の經濟政策 — (昭七・六、菊判四八頁、 $\text{H} 50$ )
- \* 武田鼎一 **全體觀的社會經濟學** (昭七・六、敬文堂、菊判三五六頁、 $\text{H} 200$ )
- \* 八木澤善次 **經濟學序說** 第二冊 (昭七・二、巖松堂、菊判一九七・七四四頁、 $\text{H} 200$ )
- \* 佐多隆忠譯、カウツキー **新版資本論解説** (昭七・二、改造社、四六判三九八頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 橋本弘毅譯、ヤ・デイーマン **マルクス主義政治教程** 三 (經濟計劃、昭七・二、白揚社、菊判一九九・三四八頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 藤田秀夫譯、モトロフ **ソヴェート同盟に於ける計劃經濟の勝利** (昭七・二、共生閣、四六判六六頁、 $\text{H} 30$ )
- \* 井關孝雄 **統制經濟の基礎知識** — 經濟參謀本部とは何か — (昭七・二、東京書房、四六判二五六頁、 $\text{H} 100$ )
- \* 經濟統制の研究 (早稻田大學創立五十年記念論文集、昭七・二、早稻田大學出版部、菊判五一三頁、 $\text{H} 60$ )
- \* 高島素之譯、マルクス **資本論** (第一・五卷、昭七・七、改造社、四六判、 $\text{H} 100$ )
- \* **マルクス・エンゲルス全集** (第二五卷、昭七・七、改造社、四六判四二二頁)

- \* 東京商科大学國立立學會編 **經濟學研究** (昭七七、岩波書店、菊判四二四頁、¥1,000)
- \* 北川淳一郎 **經濟概論(各論一)** (昭七七、北川淳一郎、菊判二一六頁、¥1,100)
- \* 岡本利吉 **經濟學確證(實生活編)** (昭七七、純眞社、四六判三三九頁、¥1,000)
- \* 北澤新次郎 **經濟組織論** (昭七七、泰文社、菊判四六五頁、¥300)
- \* 井上貞藏・小林幾次郎譯、ロバートソン 自 **由貿易經濟論** (昭七七、同文館、菊判二六六頁、¥1,000)
- \* 橋本弘毅譯、ラビドウス・オストロヴィチヤノフ **マルクス主義經濟學教程** (昭七八、白揚社、菊判四九二頁、¥1,300)
- \* 高田保馬 **經濟學新講** (第五卷變動の理論 昭七六、岩波書店、菊判五一四頁、¥300) 「研究論集」長尾教授の紹介参照。
- \* 大野信三 **經濟科學綱要** (昭七八、敬文堂、菊判六六九頁、¥300)
- \* 山田一郎譯、パウ・バルト **經濟的史觀** (社會文庫、昭七八、日本評論社、四六判二七四頁、¥600)
- \* プロ科學ソヴェート同盟研究會譯、ソ同盟共產黨中央委員會辯證法講座(一) **生産力論** (昭七八、白揚社、四六判一七七頁、¥600)
- \* 戸野原史朗譯、アドルフ・ウエバー **更生資本主義** (昭七八、淺野書店、四六判一七八頁、¥1,000)
- \* 小島精一 **日本計劃經濟論** (昭七八、千倉書房、菊判二九八頁、¥1,100)
- \* 小島昌太郎譯、ワーゲマン **國民經濟組織の缺陷と世界恐慌** (昭七八、雄風館、菊判三五五頁、¥300)
- \* 金子應之助・高橋誠一譯、ジー・ディー・エツチ・ユール **世界恐慌と英國の對策** (昭七八、森山書店、四六判一三六頁、¥600)
- \* 猪俣津南雄 **極東に於ける帝國主義** (經濟學全集第二四卷、昭七八、改造社、四六判四二三頁、¥1,000)
- \* 柴原龜二譯 **國家社會主義と同業組合社會主義と資本主義の嚴正批判** (昭七八、的場龍作、四六判二六六頁)
- \* 西雅雄譯 **レーニン主義の諸問題** (スターリン著作集第五冊、昭七八、白揚社、四六判三三〇頁、¥600)
- \* 藏原惟人 **プロレタリアートと文化の問題** (昭七八、鐵塔書院、四六判二八五頁)
- \* 河野重弘譯 **經濟學の根本問題** マルクス經濟學方法論的諸問題 (昭七九、共生閣、四六判四七五頁、¥250)
- \* 經濟批判會譯、ヴァルガ **世界經濟年報** 一七 (昭七九、叢文閣)
- \* 神戸商業大學商業研究所編 **重要經濟統計** 八 (大正二年乃至昭和七 (昭七九、大阪興文館、菊判三六三頁、¥250))
- \* 三宅喜二郎 **我國に於ける貨銀物價の統計的研究** (昭七九、森山書店、菊判一七五頁、¥50)
- \* 井關孝雄 **日本統制經濟論** (昭七九、高瀬書房、四六判二二三頁、¥1,000)
- \* 林癸未夫 **國家社會主義と統制經濟** (昭七九、前衛閣、四六判六〇頁、¥600)
- \* 產業勞働調査所譯、サヴェイト **經濟及經濟政策** (一九三二、第一四年期、昭七九、叢文閣、四六判二六六頁、¥600)
- \* 慶應義塾大學金融研究會編 **恐慌と世界經濟** (昭七九、丸善株式會社、菊判四九九頁、¥800)
- \* 請川健藏 **經濟國家主義** (昭七一〇、崇文堂、四六判二〇五頁、¥1,000)
- \* 高橋清三郎譯、A・C・ビーグー **戰爭經濟學** (昭七一〇、内外社、四六判一八九頁、¥1,000)
- \* 高橋龜吉 **經濟學の基礎知識** (昭七一〇、千倉書房、四六判五三三頁、¥1,000)
- \* 八木澤善次 **改訂増補經濟學序説** (第一冊、昭七一〇、巖松堂、菊判一九六頁、¥1,000)

## 經濟學・經濟學史

## 一四〇

- \* 經濟批判會譯、ザアルガ 改訂版 **世界經濟年報** 十七 (昭七・一〇、叢文閣、四六判一八三頁、¥ 600)
- \* 塚本三吉 **經濟學辭典・上** (經濟學全集第五卷 (昭七・一〇、改造社、四六判四二四頁、¥ 1100))
- \* 上野陽一 **計畫經濟と管理** (昭七・一〇、千倉書房、四六判二九二頁、¥ 1100)
- \* 森武夫 **米國戰時計畫經濟論** (昭七・一〇、淺野書店、四六判三〇四頁、¥ 1100)
- \* 經濟批判會譯 **ソヴェート同盟計畫經濟** 世界經濟叢書第八卷 (昭七・一〇、叢文閣、四六判四五六頁、¥ 50)
- \* 犬丸秀雄譯、チャップマン **經濟學原論** (昭七・一一、寶文館、四六判一九四頁、¥ 140)
- \* 松浦要 **理論經濟學講義** 第二冊 (昭七・一一、巖松堂、菊判一六〇頁、¥ 1100)
- \* 堀部靖雄 **ロンドン大學に於ける經濟學及商業學** (昭七・一一、長崎高等商業學校研究部伊藤久秋、菊判一九頁)
- \* 住谷悅治 赤間信義譯、ブルーノ・シユルツ **近世獨逸經濟學史** (昭七・一一、政經書院、菊判一六六頁、¥ 150)
- \* 大島唯史 **日本金融資本發達史** (昭七・一一、大衆經濟社、菊判三一九頁、¥ 500)
- \* 細川龜市 **日本寺領莊園經濟史** (昭七・一一、白揚社、菊判五七一頁、¥ 450)
- \* 神原周平編 **日本經濟年報** (昭和七年第二四半期) (昭七・一一、東洋經濟新報社、四六判三三二頁、¥ 100)
- \* 社會經濟研究會 **社會經濟評論** (昭七・一一、叢文閣、四六判、¥ 100)
- \* 竹尾式譯、プレハノフ **我等の對立** (改造文庫、昭七・一一、改造社、菊判一九〇頁、¥ 600)
- \* 橋本弘毅譯、ヤ・デイマン **マルクス主義政治教程** 上 改訂版、資本主義と社會主義 (昭七・一二、白揚社、菊判七四頁、¥ 1100)
- \* 田邊忠雄譯、ゾンバルト **プロレタリアー的社會主義** 社會文庫 (昭七・一二、日本評論社、四六判三二五頁、¥ 100)
- \* 八木澤善次 **經濟學序說** (昭八・一一、巖松堂、菊判四七四頁、¥ 350)
- \* 青木孝義譯、ビーン・シユトツク **世界經濟入門** (昭八・一一、邦光堂、四六判二二八頁、¥ 150)
- \* 經濟批判會譯、ザアルガ **世界經濟年報** 一八 (昭八・一一、叢文閣、四六判一七七頁、¥ 600)
- \* 中澤辨次郎 **都市經濟と農村經濟** (昭八・一一、淺野書店、四六判二五五頁、¥ 100)
- \* 新國民經濟の理論と實際 (昭八・一一、財政經濟時報社、菊判一一一頁、¥ 600)
- \* 直井武夫譯、ローゼンベルグ **註解マルクス資本論(第一卷)** (昭八・一一、希望閣、四六判三五五頁、¥ 1100)
- \* 正木千冬 **戰爭經濟學** (昭八・一一、一元社、四六判三三二頁、¥ 1100)
- \* 有森俊三 **マルクス經濟學の科學的批判(前編)** (昭八・一一、有森俊三、四六判二一六頁、¥ 600)
- \* 藤田敬三編 **大阪商科大学經濟研究年報** (第二號) (昭八・一一、大同書院、菊判三三四頁、¥ 100)
- \* 青木孝義譯、ビーン・シユトツク **世界經濟入門** (昭八・一一、邦光堂、四六判二二八頁、¥ 150)
- \* 野村兼太郎(他四氏) **世界經濟問題講座** (第二回) (昭八・一一、春秋社、菊判、¥ 135)
- \* 木村靖二 **原始日本生產史論** (昭八・一一、白揚社、菊判二二九頁、¥ 600)
- \* 大阪毎日新聞經濟部編 **經濟風土記(中國の卷)** (昭八・一一、刀江書院、四六判五〇九頁、¥ 100)
- \* ヴアルガ經濟批判會譯 **世界經濟年報** (一八) (昭八・一一、叢文閣、四六判一七七頁、¥ 600)
- \* 長谷川如是閑 **日本ファシズム批判** (昭八・一一、大畑書店、四六判四二一頁、¥ 160)

\* 神戸正雄 滿洲國の財政經濟 (昭八・二、立命館、菊判九四頁、¥1.00)

\* 神戸正雄 赤字時代の財政諸問題 (昭八・

一、立命館、菊判二六〇頁、¥1.00)

\* 關末代策 ケネー傳 (明大學會、菊判七〇頁)

\* 小泉信三 アダム・スミス傳 (改造社、四六判)

\* 田元培譯 ルードルス・ハウス マルクス主義哲學の方法論 (政經書院、菊判)

\* 大熊信行 配分原理と稀少性原理 (昭七・

十一、同文館、菊判三三頁、¥0.30)

高橋正雄 アモン教授の賃銀論——一つの「國民經濟」的理論 (經濟學研究、二卷)

湯淺興宗 イタリアの社會經濟制度とその理論 (大倉學會誌、四卷二號)

佐々木吉郎 家計論に關する若干の考察

(一) (明大商學論叢、一一卷二號)

石川興二 經濟學の認識主觀としての實踐哲學者 (經濟論叢、三四卷一號)

加古祐二郎 經濟法と組織經濟 (法學論叢、

二七卷一號)

牛島廣治郎 古典學派の世界經濟概念 (國民經濟雜誌、五二卷一號)

齋藤清 資本主義の一般的危機——大森氏の所論に就いて (大倉學會誌、四卷二號)

平田慶吉 資本論の誤譯 (經濟往來、七卷一號)

木村健康 シュテフィンガー「經濟學体系」(經濟學論叢、新九卷)

勝田外八名 昭和七年經濟觀測座談會 (東洋經濟新報、一四八〇卷)

酒井市太郎 地代論に就いて——河上博士の地代論を見る (大倉學會誌、四卷二號)

阿部勇 獨逸資本主義の危機 (世界經濟、七卷)

小島精一 獨逸資本主義の危機と賠償問題の前途 (東洋經濟新報、一四八〇卷)

木村健康 ファン・ドルフの「賃銀基金說」(經濟學論叢、二卷一號)

美濃部亮吉 フランス經濟の危機 (改造、一四卷一號)

小池徳太郎 フリドリッヒ・フォン・ウィーザアの歸算理論 (三田學會雜誌、二五卷一二號)

堀博士講演 「經濟學者リカアドウ」の概要 (大倉學會誌、四卷二號)

大谷孝太郎 マルクシストの新支那觀(上)——ウィットフオーゲルの「支那經濟社會」批判 (支那、二三卷二號)

小松貞夫 マルサス人口理論に於ける似

非眞理性 (大倉學會誌、四卷二號)

向井章 モンクレティアンの經濟及び經濟學說 (經濟と經濟、三卷一號)

小泉信三 餘剩價值と利潤 (三田學會雜誌、二五卷一二號)

伊藤久秋 理論經濟學に於ける靜態と動態 (一) (長崎商學研究會報、一八卷五號)

木下彰 アメリカ農業資本主義の轉換期——一九〇〇年前後に於ける農業集約化の研究 (社會經濟史、一卷三號)

向井章 アリストテレス及チネイの生産概念 (山口商學雜誌、一〇卷)

杉本秋男 資本維持學說の展望 (會計、三〇卷二號)

大塚金之助 資本主義の「計畫經濟」(改造、一四卷二號)

野村兼太郎 太宰春臺の經濟論 (三田學會雜誌、二六卷二號)

高田保馬 蓄積理論の一考察 (經濟論叢、三四卷二號)

高橋誠一郎 賃銀學說史上の生存費說賃銀基金說及び收益說 (社會經濟史學、一卷四號)

羽仁五郎 東洋に於ける資本主義の形式 (一) (史學雜誌、四三卷二號)

## 經濟學・經濟學史

向坂逸郎 「獨占的」地代理論（林要氏の地代論）（經濟佐來、七卷二號）

高橋誠二郎 マーカンチリズム時代の主權及び財産理論（三田學會雜誌、二六卷一號）

高橋誠一郎 全國經濟調查機關聯合會第四拾七會東京支部會座談會（全國經濟調查機關聯合會調査及資料彙報別冊、五一卷）

阿部勇 アメリカ資本主義の動搖（中央公論、四七卷三號）

C. Kasai Women and Economics（商業論集、三卷）

我妻榮 カール・ティール「資本主義の法律的基礎」（法學協會雜誌、五〇卷三號）

櫛田民藏 河上博士の地代論（大原社會問題研究所雜誌、九卷一號）

奥田忠雄 現實性認識への道——理論經濟學方法論叙説（三田學會雜誌、二六卷三號）

小原敬士 資本主義概念の觀念論的規定について——ゾムバルト研究の一節（橫濱商專研究論集、三卷）

佐々木吉郎 社會經濟學と經營經濟學——辯證法的把握を中心として（經營經濟研究、一三卷）

上田貞次郎 商業經濟學と商業經營學及「經營經濟的交通學」——谷口吉彦君の新著

「商業組織の特殊研究」を讀む（經營經濟研究、一三卷）

三宅喜二郎 ジアン・ポオダンの物價論（一）（國民經濟雜誌、五二卷三號）

松下正壽 政治學に於ける經濟至上主義（商學論叢、四卷）

室谷賢治郎 富田喜代藏著「經營原理」（商學討究、六卷下）

伊東俗吉 勞働價值説の基本的考察（三田學會雜誌、二六卷三號）

平尾彌五郎 我金本位制離脱の世界經濟的意義（國際知識、一二卷三號）

平尾彌五郎 資本論翻譯史（中）（エノノミスト、一〇卷四號）

安井琢磨 アレキサンダー・ピリモウィツチ「オッペンハイマアの價格理論」（經濟學論集、二卷三號）

上林貞治郎 所謂「生産性」の吟味——マクス・ウェーバーの所説（企業經營、六卷三號）

太田義夫 カールメンガーの社會科學特に政治經濟學の方法に關する研究（三）（立命館學叢、三卷七號）

佐々木吉郎 家計論に關する若干考察（其ノ二）（明大商學論叢、一一卷五號）

## 一四二

藤原明夫 軍國經濟の經綸（經濟佐來、七卷四號）

氣賀健三 經濟的原則の意義（三田學會雜誌、二六卷四號）

P・ゼンチソン 經濟難と伊太利政府（外國の新聞と雜誌、二五八卷）

和辻哲郎 現代日本と町人根性（上）（思想、一一九卷）

生島廣治郎 市場經濟的世界經濟概念に關する一學説（國民經濟雜誌、五二卷四號）

世界經濟批判會 支那にのびる列強資本の觸手——支那における資本の支配機構（中央公論、四七卷四號）

羽仁五郎 東洋に於ける資本主義の形成（二）——アジア的生産様式と支那社會（史學雜誌、四三卷三號）

ミカエル・フアブマン 獨逸と國家資本主義（外國の新聞と雜誌、二五八卷）

小島精一 封鎖經濟と産業統制（中央公論、四七卷四號）

武井大助 封鎖經濟と産業統制（經濟佐來、七卷四號）

向坂逸郎 浮動せる經濟學——小泉信三氏著「經濟原論」を讀みての感想（中央公論、四七卷四號）

立野耕 米國に於ける大會社の經濟生活上の重要性 (二) (企業經營、六卷三號)

立野耕 戰爭經濟學 (一) — 戰費の卷 (エコノミスト、一〇卷六號)

立野耕 論壇太平記 (三) — 資本論講釋史 (ト) (エコノミスト、一〇卷六號)

木村健康 「價值理論終焉」の諸問題 (經濟學論集、二卷四號)

東晋太郎 企業利潤の倫理的考察 (商學評論、一〇卷四號)

高橋龜吉 巨大財閥の方向轉換 (中央公論、四七卷五號)

小泉信三 經濟行爲の倫理的認識 — アダム・スミスの倫理學と經濟學 (中央公論、七卷五號)

土方成美 經濟參謀本部論 (經濟作來、七卷五號)

酒枝義雄 經濟の運命的原理 (早稻田政治經濟學雜誌、二四卷)

大上末廣 支那國民經濟序説 (上) — 主として官吏資本を中心として (經濟論叢、三卷五號)

向井鹿松 資本主義と計畫經濟 (經濟作來、七卷五號)

經濟學・經濟學史

トマス・N・カーバー 資本主義は滅びず (外國の新聞と雜誌、二六卷)

高田保馬 前進變動の理論 (經濟學研究、二卷一號)

北澤新次郎 田中穂積博士著「政府新報」國民經濟概論に就いて (早稻田商學、七卷三號)

車谷馬太郎 ベーピン及コールの「恐慌の真相、原因、對策」を讀む (上) (大阪銀行通信錄、四一六號)

北澤新次郎 ホブソン著「富裕裡に貧窮は蔓延」(J. A. Hobson, Poverty in Plenty) (早稻田商學、七卷三號)

高柳松一郎 滿蒙の經濟問題に就て (全國經濟調査機關聯合會調査及資料彙報別冊、五三卷)

大道安太郎 理念型の方法の客觀性 (商學評論、一〇卷四號)

山口正太郎 了解科學としての經濟學 (經濟論叢、三四卷五號)

伊藤久秋 理論經濟學に於ける靜態と動態 (二) (長崎商大研究雜誌、一九卷三號)

伊藤久秋 資本論講釋史 (上) (エコノミスト、一〇卷八號)

伊藤久秋 資本論講釋史 (下) (エコノミスト、一〇卷五號)

濱田恒一 英國歷史學派に於ける方法論の發達 (三田學會雜誌、二六卷五號)

岩野晃次郎 エドウィン・キャナン「人口増加率の遞減と經濟理論の變遷」(經濟學論集、二卷五號)

大河内一男 カール・マツサール「實銀政策と經濟理論」(經濟學論集、二卷五號)

小池基之 歸算理論と分配論 — 堀太利學派の分配論に就いての一考察 (三田學會雜誌、二六卷六號)

村瀬忠夫 近代經濟に於ける價格の意義 (早稻田政治經濟學雜誌、二五卷)

馬場敬治 技術本質論の發展 — 技術の本質に關する學說史的考察 (經濟學論集、二卷五號)

三谷滿雄 經濟學に及ぼしたる世界大戰の影響 (研究資料彙報、七卷三號)

中山伊知郎 經濟均衡理論の本質と價格勢力學說 (東京商大研究年報、經濟研究、一卷)

酒枝義雄 經濟の運命的原理 (承前、完) (早稻田政治經濟學雜誌、二五卷)

汐見三郎 國民所得の分配の型を論ず (經濟論叢、三四卷六號)

大塚金之助 國家資本主義「計畫經濟」

一四三

## 經濟學・經濟學史

## 一四四

一九三二年ドイツ經濟思想史の一部  
(改造、一四卷六號)

山口茂 古典經濟學に於ける市場理論の

諸想—J. B. Sayの經濟學史並に恐慌學說  
上の地位(東京商大研究年報經濟學研究、一卷)

犬上末廣 支那國民經濟序說(下)(經濟論  
叢、三四卷六號)

赤木進 シュトイエルマン「世界危機—  
世界轉向、國家資本主義への過程」(國家  
學會雜誌、四六卷六號)

増井幸雄 セイの私的及公的消費論(三田  
學會雜誌、二六卷六號)

山田雄三 チウネン書目解題(東京商大研  
究年報經濟學研究、一卷)

奥田忠雄 辯證法の基本的諸特徴と體系  
とに就いて—理論經濟學方法論敍説(三  
田學會雜誌、二六卷六號)

織戸登代子 マルクス蓄積理論と固定資本  
(改造、一四卷六號)

高田保馬 利子に關する試論(經濟論叢、二  
四卷六號)

伊藤久秋 理論經濟學に於ける靜態と動  
態(三)(長崎商大研究館電報、一九卷四號)

山口正太郎 計畫經濟の原理について(エ  
コノミスト、一〇卷一二號)

古野清人 原始經濟に於ける呪術・宗教的  
要素—(一)マリノウスキ一派の社會的  
機能説を主として(社會學、一卷)

名和統一 現代經濟の特徴とそのイデオ  
ロギー(經濟時報、四卷四號)

俄國一 工業教育と經濟學(工業經濟研究、  
一卷)

竹中靖一 スミスの歴史學的敎養と環境  
—特に彼の前半生に就て(經濟論叢、三五卷  
一號)

古屋美貞 制度派經濟學(同志社論叢、三八  
卷)

赤松要 世界經濟の異質化と同質化(商業  
經濟論叢、一〇卷上)

大塚金之助 ソヴェート同盟の社會經濟  
に關する國際的文獻(一九三二)—英・米・  
獨・佛・日(社會學、一卷)

大塚金之助 ドイツ經濟學の近情—一九  
三二—二年經濟學のノートから(中央公  
論、四七卷七號)

下田博 ホアギルベールの「富の本質  
論」—フイジオクラアト學說の出所再吟  
味(三田學會雜誌、六卷七號)

酒井正三郎 了解經濟學の基礎理論(商業  
經濟論叢、一〇卷上)

經濟論叢(一〇卷上)

一九三二年柏林國際會議(國際事情、三三  
三卷)

獨逸經濟の現情(一)(日本商工會議所經濟月  
報、四卷六號)

ホドソン 英帝國經濟ブロック確立のオ  
ツタワ會議を前にして(國際パンフレット通  
信、五一四卷)

後藤信夫 オタワ帝國會議とその諸問題  
(エコノミスト、一〇卷一四號)

森田優三 價格變動率の研究(國民經濟雜  
誌、五三卷二號)

早川三代治 經濟學者としての大西教授  
—追憶(商業討究、七卷上)

勝呂弘 經濟恐慌と保險界(一)(長崎商大  
研究館電報、二〇卷一號)

高橋龜吉 現下世界恐慌の特質と其の當  
面的對策の方向(大育學會誌、四卷一號)

古野清人 原始經濟に於ける呪術・宗教的  
要素(二)—新社會學主義の見地につい  
て(社會學、二卷)

生島廣治郎 コツトル經濟學より觀たる  
國民經濟及び世界經濟統体概念(國民經  
濟雜誌、五三卷二號)

生島廣治郎 鎖國經濟及世界經濟思想の



發達（外交時報、六三卷二號）

堀江邑一 支那に於ける農業經濟の崩壞とその影響（一）（商工經濟研究七卷二號）

佐原貴臣 所得の掠奪性—所得の使用過程より觀る（高岡商工研究論集、五卷一號）

松下正壽 政治學に於ける經濟至上主義（商學論叢、四卷）

有澤廣己 再禁止後の日本經濟は何を豫想せしむるか（改造、一四卷八號）

向井章 戰近の恐慌學說の發展（山口商學雜誌、一一卷）

吉田秀夫 マルサスの價值論とその社會的役割（大倉學會雜誌、四卷一號）

太刀川利男 モーアの需要の法則（産根高商論叢、一一卷）

オッタワ會議の重要性（外國の新聞と雜誌、二六六卷）

在オッタワ英帝國經濟會議とランカンア綿業及貿易狀態（海外經濟事情、五卷二八號）

世界經濟恐慌概觀（海外經濟事情、五卷三〇號）

獨逸經濟の現情（二）（日本商工會議所經濟月報、四卷七號）

滿洲經濟の發達（滿鐵調査月報、一二卷七號）

## 經濟學・經濟學史

野村兼太郎 荻生徂來の經濟論（三田學會雜誌、二六卷八號）

II・J・バーグマン 危機に立つ獨逸資本主義（ダイヤモンド、二〇卷二六號）

蠟山政道 計畫經濟と行政組織（經濟往來、七卷一〇號）

村瀬忠夫 近代經濟に於ける價格の意義（早稻田政治經濟學雜誌、二六卷）

土方成美 經濟參謀本部論（經濟往來、七卷一〇號）

大山卯次郎 經濟上より見たる日米關係（外交時報、六三卷五號）

高田保馬 經濟に於ける勢力—中山教授の批評に答ふ（經濟論叢、三五卷二號）

堀眞琴 國家主義と國際主義の相剋（經濟往來、七卷九號）

生島廣治郎 鎖國經濟及世界經濟思想の發展（一）（外交時報、六三卷四號）

青木得三 資本管理（經濟往來、七卷九號）

松岡孝兒 シヤール・ジイドと其の學風（經濟史研究、三五卷）

高田保馬 時差說覺書（經濟論叢、三五卷三號）

小島精一 世界恐慌果して底入れか？（經濟往來、七卷九號）

飯田繁 戰後世界經濟恐慌諸特質（經濟時報、四卷六號）

大塚一朗 總體經濟と個別經濟（上下）（經濟論叢、三五卷二三號）

W・Z・フオスター ソヴエト・アメリカ（日本讀書協會々報、一四二卷）

田丸朝美 統制經濟と公營事業の範圍擴張（經濟往來、七卷一〇號）

北村五良 統制經濟の基礎理論（國民經濟雜誌、五三卷三號）

II・J・バーグマン 獨逸資本主義の臨終（外國の新聞と雜誌、二六八卷）

F・ドレエジ 佛蘭西は如何して世界經濟を征服したか（國際パンフレット通信、五二五卷）

E・F・ブラウン 米國の經濟恢復案（外國の新聞と雜誌、二六八卷）

伊東岱吉 勞働價值說の諸問題（三田學會雜誌、二六卷八號）

英帝國ブロック形成過程としてのオッタワ會議（世界經濟、一四卷）

中國經濟の現狀及將來（一）（滿鐵調査月報、一二卷八號）

滿洲の日本に對する經濟的苛與（滿鐵調査月報、一二卷八號）

## 經濟學・經濟學史

一四六

- 上田貞次郎 所謂ブロック經濟と國際分業 (國際知識、一二卷一〇號)
- 瀧谷善一 オツタワ會議の世界經濟的意義 (國民經濟雜誌、五三卷四號)
- 小原敬士 近代資本主義の發端に關する一論争—ゾンバルト批判者としてのドーブシュに就て (橫濱商專研究論集、四卷)
- 氣賀健三 經濟學の「社會的法的」基礎 (三田學會雜誌、二六卷九號)
- 勝呂弘 經濟恐慌と保險會 (二) (長崎高商研究館彙報、二〇卷二號)
- 高木友三郎 經濟行爲と衝動との關係 (經濟志林、六卷二號)
- ブルツキングス 經濟前進策 (外國の新聞と雜誌、二七一卷)
- 高垣寅次郎 國際經濟に於ける鎖國化 (エコノミスト、一〇卷一九號)
- 平貞藏 ゴール以前の經濟生活 (經濟志林、六卷二號)
- 北澤新次郎 世界經濟會議は經濟恐慌を克服し得るか (外交時報、六四卷一號)
- 宮崎力藏 社會經濟と基督教 (一) (橫濱商專研究論集、四卷)
- 鹽野谷九十九 單純再生產理論と經濟靜態理論—經濟理論研究への覺書 (橫濱商專研究論集、四卷)
- 武田鼎一 統制經濟と價格公定 (エコノミスト、一〇卷一八號)
- 馬場敬治 統制經濟と組織の問題 (經濟作來、七卷二號)
- 作田莊一 日滿經濟同盟 (エコノミスト、一〇卷一九號)
- 淺香末起 日滿經濟ブロックと南洋華僑排日問題 (經濟時報、四卷七號)
- 猪谷善一 日滿統制經濟論 (外交時報、六四卷一號)
- 石濱知行 日本に於ける資本主義の成立 (改造、一四卷一〇號)
- 高柳賢三 ボイコット論序説 (二、完) (法學協會雜誌、五〇卷二〇號)
- 深井英五 ラスキーンと經濟學と社會主義 (東洋經濟新報、一五一七卷)
- 高田保馬 利子歩合の理論 (經濟論叢、三五卷四號)
- 堀經夫 ロングフィールドの價值論と分配論 (經濟論叢、三五卷四號)
- 英帝國オツタワ經濟會議概要 (海外經濟事情、五卷三八號)
- オタワ會議の協定 (外國の新聞と雜誌、二七卷一號)
- 世界經濟を動かす國際ブロックの對立 (エコノミスト、一〇卷一九號)
- 世界經濟恐慌の研究 (一) (東洋貿易研究、一一卷九號)
- 中國經濟の現状と將來 (二) (滿鐵調査月報、一二卷九號)
- 田中定 アダム・スミスの土地所有形態論 (經濟學研究、二卷二號)
- 石川興二 安定期經濟學と變革期經濟學 (經濟論叢、三五卷五號)
- 小池基之 カアル・メンガーと價值心理學 (三田學會雜誌、二六卷一〇號)
- 櫛田民藏 河本氏の地代論 大原社會問題研究所雜誌、九卷二號)
- 栗村雄吉 供給函數論 (經濟學研究、二卷二號)
- 氣賀健三 經濟學の心理的個人主義的基礎—リーフマンの經濟學方法論 (三田學會雜誌、二六卷一〇號)
- 丸谷嘉市 經濟自由主義の再吟味 (國民經濟雜誌、五三卷五號)
- 奥田忠雄 現象形態論—理論經濟學方法論敘説 (三田學會雜誌、二六卷一〇號)
- 新川傳介 資本主義の將來 (ウエルナー・ゾムバルト) (一) (長崎高商研究館彙報、二〇卷三號)

G・ソウル 社會經濟統制論（日本讀書協會  
々報、一四四卷）

石田與平 證券資本主義時代に於ける資  
本の構造（經濟論叢、三五卷五號）

増井幸雄 ジ・ベ・セイの交換論（三田學會  
雜誌、二六卷一〇號）

久留間駿造 高田博士の蓄積理論の一考  
察（大原社會問題研究所雜誌、九卷二號）

高橋誠一郎 貨幣學說史上の收益説（三田  
學會雜誌、二六卷一〇號）

向井鹿松 統制經濟と計畫經濟（三田學會  
雜誌、二六卷一〇號）

林葵未夫 統制經濟と國家社會主義（ダ  
イヤモンド、二〇卷三一號）

高橋次郎 ファツシズム經濟論（商學討究、  
七卷中冊）

宇野弘藏 マルクス再生産論の基本的考  
察（中央公論、四七卷一二號）

堀經夫 ロングフィールドの價值論と分  
配論（下）（經濟論叢、三五卷五號）

沙見三郎 大阪市民の富（經濟史研究、三七  
卷）

平井新 カベエの共產主義体系（三田學會  
雜誌、二六卷三號）

納武津譯、A・ソルター 經濟恢復論（日

本讀書協會々報、一四五卷）

田中博 經濟地域に關する一考察（研究と  
資料、二卷）

土方成美 經濟理論の危機（經濟作來、七卷  
一三號）

林葵未夫 國家社會主義の理論的基礎（講  
演、二〇一卷）

新川傳介譯、ゾムバルト 資本主義の將來  
（一）（長崎高商研究會叢報、二〇卷四號）

松好貞夫 正司考棋の經濟論（經濟史研究、  
三七卷）

佐藤守 自由と統制（經濟評論、一六卷）  
高田保馬 制欲説の吟味（經濟論叢、三五卷  
六號）

鹽野谷九十九 世界恐慌とイギリス經濟  
學者（橫濱商專研究論集、五卷）

小早川充 世界恐慌より計畫經濟へ（商學  
論叢、六卷）

小原敬士 轉形期の經濟地理學とその問  
題（橫濱商專研究論集、五卷）

金谷賢字 リカルド價值論の基本問題（經  
濟評論、一六卷）

長岡徳治 我國國民經濟の目標と國民の態  
度（講演、一九八卷）

エミール・レンギエル 歐洲に於ける國家  
資本主義の發展（ダイヤモンド、二〇卷三八  
號、頁二五—二八）

伊藤久秋譯、ジェオルジ・ラッセル 企  
業の經濟的分類（一）（長崎高商研究會叢報、  
二〇卷五號、頁一二—二六）

大道安次郎 經濟學說史の方法論的序説  
（完）（商學評論、一一卷三號、頁二八—四八）

藤野靖 經濟地理學の發達及地理學上に  
占むる地位（商業論集、七卷一號、頁二二—  
二六）

小宮孝 文化科學としての經濟科學（商  
學評論、一一卷三號、頁四九—八四）

山田秀男 勞働價值説の成立と發展と完  
成（經濟集志、五卷三、四號頁一—四二）

塚本信治 我國早期資本主義の發展と心  
學（產根高商論叢、一二卷、頁三三—二四八）

大熊信行 配分原理と稀少性原理（高岡高  
商研究論集、五卷二號）

## 財政學

大内兵衛 日本財政論 公債篇 經濟學全集第二  
二卷（昭七・一〇、改造社、四六判本文二五三頁附錄

「三頁」(100) 本文を日本公債論と題し、日本公債統計表及統計圖表が附録となつてゐる。著者はこの書の成立についていふ、

「學友阿部勇君の協力を得て、案を樹て直し、なるべく實用的な日本財政のハンドブックを作らうと云ふことになつた。……」

私は先づ公債に關する資料を集め、阿部君は先づ租税に關する資料を集めることにした。……兩人とも材料が集まるに従ひ案に依つて執筆して見ると、兩者必ずしも見解を等しくせず、また、二つの部分の論述必ずしも統一されてゐないことを發見した。そこで各分擔について責任を分離することとし、従つてまた、當初のハンドブックの案を固執せぬこととした。」さうして出來たのが、この書物である。一部は飯淵敬太郎氏との「共同の勞作」だともいはれてゐる。さらに、この方面の文獻史の貧困についていふ、「いま、本書において試みやうとしてゐる日本の國債の歴史に關しては、日本にも、二三の文獻がないことはない。中にも、『明治財政史』、第八卷、第九卷國債」(明治三十八年刊行)と大藏省編纂『國債沿革略、第一卷及第二卷』(大正六年及

同七年刊行)がある。前者は明治年代の中途、後者は大正四、五年頃までしか及んでゐないのは遺憾であるが、官廳歴史として典型的な正確さをもつてゐる。また學者の手に成つたものには工藤重義博士の『國債史』(明治四十二年刊行)があり、その外、多くの財政學教科書も亦それぞれ公債の沿革を語つてゐる。……更に、近時の公債に關する著としては、青木得三氏『日本國債論』(昭和三年)をあぐべきであらうが、これは公債法規及び公債制度の技術的説明以上のものでない。これに比べれば、土方成美博士の『日本公債論』(山崎博士還歴記念論集『經濟學研究』金融篇所收)は日本の公債制度を國民經濟との關聯において見ようとしたと云ふ意味で、まとまつた唯一の日本公債史論として注目し得るが、その論點は多岐に過ぎ、折角の意圖にもかかはらず、公債制度そのものの經濟的意義についてはあまり多くを語り得てゐない。之を要するに、公債制度がすでに長く存続し、それが極めて大きい經濟的社會的影響をもつてゐるにかかはらず、日本の學界はそれについて充分に正確な認識をして見よ

うと云ふ努力をしたとは云はれない。」「(一六・一七頁) しかば、なぜこの方面の科學的な展望が、閉塞されてゐたのであるか? 著者はこたへて、「問題は自ら現在ブルジョア科學の、一つの特色を語るものとして、また、プロレタリア科學の使命とその現在の、缺陷との問題として、改めて論究さるべきであらう」といひ、「吾々はこゝに吾々の社會科學の内に、まだ鍬の入れられない廣い耕地を展望してよいのであらう。いな、吾々は、力をこめてこゝを耕し初めてよいと思ふ。」といふ。さういふ意味において、この書物は、「問題の所在」および「未耕地の輪廓」を示すものだ。わけて多くの統計がしめされてゐるのは、この意味の「入門書」たらしめる著者の用意である。日本における國債統計は、「國債統計年報」(大藏省)を唯一の主要な資料とし、これと「國債額明細表」(同上)とを基礎として、有價證券買上の知識としての公債統計がある。それらから部分的にぬきがきしたものに、「統計年鑑」その名の「年鑑」がある。著者はいふ、「しかし『年報』はその名の示す如く年報である故に、吾々の歴史的考察には殆

んど用をなさない。また年報から作成せられた他の統計は既にそれぞれの必要あつて作られたものであるから、吾々の利用し得る範圍は極めて限定的である。そこで、本書において、私は努力を厭はず、吾々の問題の認識に便利なやうな統計を作ることを試みた。」(一七・一八頁)全卷が四章にわけられてゐる。第一章明治初期に於ける國債制度、第一節國債制度の誕生、その高利貸資本的性質と資本の原始的蓄積、第二節信用制度の發展と公信用の資本主義的性質の確立。第二章日本資本主義上昇期に於ける國債制度(四節からなりたつ)。第三章帝國主義の時代に於ける國債制度(三節からなりたつ)。第四章總括——日本公債の統計的觀察。おしまひの章は、本文と附録とのあひだのかけはしであり、附録のなかのいくつかの統計について、説明があたへられ、それらにあらはれてゐる「顯著な傾向」が指摘され、そして、三章までの論述を「統計的に補足し、確認しつゝ」、讀者の國債統計にたいする一般的な注意をうながすことを目的としてゐる。第三章のむすびに著者はいふ、「要するに、日本公債制度が昭和四

年末において當面しつゝある狀態は、たゞに制度そのものが未曾有の危機に瀕してゐることを、いろいろに語つてゐるのみでなく、その問題の發展の可能性は更に更に大きく、その社會的意義は測り知り得ないほどに深刻にして且つ深遠であることを示してゐると云はねばならない。譬ふれば、すでに腐朽しつゝある大樹の如く、まさに自力更生の力を失ひつゝあるあの如くである。もし、それが一旦倒壊し始めるやうなことにでもなるならば、必ずや大地自身をも掘り返すに至るであらう。」(二一五頁)

\* 阿部勇 **日本財政論** 租稅篇 經濟學全集第五卷(昭七・一、改造社、四六判六七頁、四・〇〇)

著者は序にいふ、「本書は日本財政論の一部として大内先生の公債論と共に一體をなす……分離して世に送らるるに至つた理由は、既に大内先生の公債論(大内兵衛著「日本財政論公債篇」本全集第二二卷、昭七・一〇)の序文において明かである。……」

本書は理論の書物と云ふよりもむしろ日本租稅制度、材料書と云ふ意味が強くなつた。しかし財政と云へば國家の收入支出の學問であつたり、高遠な配分學の講釋であ

つたりしてゐる場合、こんな書物も一冊位あつてもよいかと思ふ。……本書の完成は何よりも全く大内先生の指導の贈物である。」全卷が四章からなりたつ。第一章租稅制度の成立と發達、第二章稅制改革の歴史、第三章現行租稅制度、第四章資本租稅制度の矛盾。引用書のうち、理論的なものにはマルクス、批判の對象としてはシェンベーターがある。

\* 吉田秀雄譯、リカアドウ **經濟學及課稅の諸原理** 世界大思想全集第七三卷(昭七・三、春秋社、四六判四七二頁)

\* 小川郷太郎、沙見三郎 **財政學**(昭七・三、有斐閣、菊判六九二頁、四・〇〇)

\* 山中長作 **日本の財政經濟**(昭七・四、山中長作、四六判三五頁、四・〇〇)

\* 阿部勇譯、ナヒムソン **財政學(批判的理論的解説)**(昭七・六、鐵塔書院、菊判三九〇頁、四・〇〇)

\* 河田烈 増補新編 **帝國歲計豫算の話**(昭七・六、財政經濟學會、菊判一四二頁、四・〇〇)

\* 高木壽一 **世界戦後の國家財政** 世界經濟問題叢書(昭七・八、同文館、四六判三一三頁、四・〇〇)

\* 木村清一 **地方財政に於ける一二の問題**

に就て (昭七・八、全國町村長會、四六判三五頁)

\* 藤谷謙二 我國最近の地租問題 (昭七・八、大阪商科大学研究所、菊判三〇八頁、B500)

ゲ・グリニコ 一九三二年度ソヴェート・ロシアの財政 (國際パンフレット通信、四六〇卷)

汐見三郎 英米の所得税 (經濟論叢、三四卷一號)

瀬川次郎 Capital Levy に關する若干の考察 (一) (同志社論叢、三六卷)

榎潤 減債基金の研究 (銀行論叢、一八卷一號)

大竹虎雄 國費と地方費 (六) (自治研究、八卷一號)

永安自治 戶數割代税制度論 (自治研究、八卷一號)

岩野晃次郎 主觀主義的財政學說の發展 (一) (經濟學論叢、新九卷)

唯野喜八 新地租法の説明 (四) (自治研究、八卷一號)

土方成美 税制整理と赤字公債 (改造、一四卷一號)

三好重夫 地方税法に於ける制限率の意義 (自治研究、八卷一號)

淺見信次良 中世及近世佛蘭西財政史 (二)

(彦根商論叢、一〇卷)

岡田正雄 獨逸財政の統計的觀察 (下) (統計集誌、六〇六卷)

神戸正雄 弗買ひ利益の課税について (上・下) (大阪朝日新聞、昭六・二、一八一・九)

神戸正雄 非寡債主義の考察 (經濟論叢、三四卷一號)

南郷幸彦 不動産信託に於ける登録税及び地方税に就て (銀行論叢、一八卷一號)

木村増太郎 行詰れる支那政府の財政 (外交時報、六〇卷六號)

英國一九三二年度改訂財政説明書 (大藏省調査月報、二二卷一二號)

英國の最近財政と國費節減問題 (其二) (大藏省調査月報、二二卷一二號)

寛城子打切發着貨物に對する中國側税捐 (滿鐵調査月報、一一卷一二號)

〔朝鮮〕直接税負擔額調 (朝鮮總督府調査月報、二卷二二號)

東京市の財政に就て (下) (銀行通信錄、五五一卷)

ブラジル國聯邦政府の外債元金及利息支拂停止 (海外經濟事情、四卷五二號)

奉天省更新豫算並に改正税制 (滿鐵調査月報、一一卷一二號)

〔朝鮮〕輸入酒類酒税 (朝鮮總督府調査月報、二卷一二號)

神戸正雄 恩師シヤンツ教授を悼む (經濟論叢、三四卷二號)

大内兵衛 神戸博士「現行税制及其整理」 (經濟學論叢、二卷二號)

大内兵衛 神戸博士「最近地方税問題」 (經濟學論叢、二卷二號)

瀬川次郎 金再禁後の豫算 (同志社論叢、三七卷)

榎潤 減債基金の研究 (銀行論叢、一八卷一號)

大竹虎雄 國費と地方費 (七) (自治研究、八卷二號)

青木得三 公債政策と歲計の均衡 (東京朝日新聞、昭七・一、七一・二)

小川郷太郎 再禁止後の財政々策 (エコノミスト、一〇卷三號)

藤谷謙二 最近のイギリス財政 (經濟時報、三卷二號)

岩野晃次郎 主觀主義的財政學說の發展 (二) (經濟學論叢、二卷二號)

神戸正雄 政府の營繕購品制度 (經濟論叢、三四卷二號)

高木壽一 租稅經濟論序説 (三田學會雜誌、二六卷一號)

外山福男 町村の資力と財政 (二) (自治研究、八卷二號)

森安三郎 智利國財政上の危機と其の應

急對策 (移民情報、四卷一號)

中澤辨次郎 都市民と農村民の租稅負擔

過程 (都市問題、一四卷二號)

國吉省三 道路維持費の負擔問題とガン

リン稅 (山口商學雜誌、一〇卷)

箭内名左衛門 農家負債整理意見 (一) (帝國農會報、二二卷二號)

社説 破綻に瀕せる中國の財政狀態 (東洋

經濟新報、一四八四卷)

チャールス・メルツ 賠償戰債及び獨逸の

財政 (外國の新聞と雜誌、二五四卷)

有澤廣己 賠償不拂聲明と歐洲の危機

(經濟作來、七卷二號)

南郷幸彦 不動産信託に於ける登録稅及

び地方稅に就て (銀行論叢、一八卷一號)

富永祐治 輸入品類別から見た關稅收入

(經濟時報、三卷一號)

小山田小七 我が國の都市經費と都市人

口 (經濟論叢、三四卷二號)

大善内閣の豫算案 (エコノミスト、一〇卷二

號)

解放と財政策 (金を繞る政戰の旗幟一

議會解散と財政々策 (エコノミスト、一〇卷

三號)

今後の財政方針 (ダイヤモンド、二〇卷四

號)

昭和七年度豫算綱要 (内外調査資料、四卷二

號)

世界經濟と平和を脅かす危機に立てる

獨逸財政の解剖 (國際資料、二卷二號)

中華民國の國債 (一) (東洋經濟新報、一四

八五卷)

チリー國財政上の危機と其應急對策 (海

外經濟事情、五卷二號)

獨逸共和國最近の財政に就て (銀行通信

錄、五五二卷)

獨逸の賠償金支拂不能の宣言 (ダイヤモンド、二〇卷三號)

バーゼル委員會の經過と新賠償會議へ

の進展 (國際資料、二卷二號)

岡田正雄 英米獨に於ける財産、勤勞課

稅に關する一考察 (一) (統計集誌、六〇八卷)

塚田一甫 恐慌と都市財政々策 (都市問題、

一四卷三號)

大内兵衛 近時に於ける交付公債の増加

について (國家學會雜誌、四六卷三號)

汐見三郎 軍事費の支辨方法 (經濟論叢、

三四卷三號)

汐見三郎 井藤半彌氏著『財政學原理』

を讀む (國民經濟雜誌、五二卷三號)

花戸龍藏 新課稅原理學說と其批評 (一)

(國民經濟雜誌、五二卷三號)

小田忠夫 中央、地方間に於ける稅源分配

問題に就て (都市問題、一四卷三號)

北崎進 地方新財源としての財産稅に就

て (都市問題、一四卷三號)

大谷政敬 都市財政々策小論 (都市問題、

四卷三號)

岡野文之助 都市財政に於ける公企業收

入論 (都市問題、一四卷三號)

織本侃 都市財政の推移と勤勞大衆 (都

市問題、一四卷三號)

鈴木武雄 都市の長期財政計畫 (都市問題、

中華民國の國債(三) 東洋經濟新報、一四八七卷)

勝間田生 赤字が消えた最近の英國財政

(ダイヤモンド、二〇卷一二號)

大谷政敬 イエヒト氏の財政の場所(二)

立命館學業、三卷七號)

大内兵衛 井藤半彌著「財政學原理」(經濟論叢、二卷三號)

永安百治 營業稅及雜種稅の混合並分離

(自治研究、八卷三號)

岡田正雄 英佛獨に於ける財産、勤勞課稅に關する一考察(完)(統計集誌、六〇九卷)

大竹虎雄 國費と地方費(一)(自治研究、八卷三號)

花戸龍藏 新課稅原理學說と其批評(其二)(國民經濟雜誌、五二卷四號)

唯野喜八 新地租法の説明(五)(自治研究、八卷三號)

神戶正雄 政友會の公債政策と國民生活

(中央公論、四七卷四號)

鹽見眞澄 デーチェルの公債論(經濟論叢、三四卷四號)

神戶正雄 動的資本と課稅(經濟論叢、三四卷四號)

チャールス・メルツ 米國財政難と其の對

策(外國の新聞と雜誌、二五八卷)

岩野晃次郎 メイ委員會報告(經濟學論集、二卷三號)

堀義貴 メキシコ國の外債整理新協定

(海外經濟事情、五卷二號)

小幡清金 目的稅論(經濟集誌、五卷一號)

英國の流動公債(其一)(大藏省調査月報、二三卷三號)

最近に於ける米國政府の財政に就て(銀行通信錄、九三卷五五四號)

果して英國政府は海峽殖民地を課稅國と爲すや?(拓務時報、二卷)

田昌 昭和七年度實行豫算を批判す(エコノミスト、一〇卷九號)

太田正孝 戰費調べ(中央公論、四七卷五號)

神戶正雄 相續稅重課の大勢と其方法(經濟論叢、三四卷五號)

永安百治 地租附加稅の不均一賦課に關する勅令解説(自治研究、八卷四號)

菊池慎三 東京市歲計の現状と將來の展望(都市問題、一四卷五號)

小田忠夫 フランスに於ける地方財政改革案(都市問題、一四卷四號)

黑澤二郎 ブラジル最近の財政經濟問題

(海外經濟事情、五卷一六號)

藤谷謙二 米國の州、地方團體間に於ける稅源配給問題(經濟時報、四卷二號)

木村増太郎 滿洲國の財政(外交時報、六二卷三號)

英國の流動公債(其二)(大藏省調査月報、二三卷四號)

昭和七年度都市豫算の展望(都市問題、一四卷五號)

東南部歐洲の危機—破產國家の續出と歐洲の新狀勢(ダイヤモンド、二〇卷一四號)

米國増稅案の劇的場面(外國の新聞と雜誌、二六一卷)

米國豫算制度大要(大藏省調査月報、二三卷四號)

永安百治 家屋稅附加稅の法人重課否認判例に就て(自治研究、八卷六號)

小田忠夫 所得稅の都會稅としての意義(都市問題、一四卷六號)

井藤半彌 拙著「財政學原理」に對して大內教授の批判に答ふ(東京商大研究年報經濟學研究、一卷)

森文三郎 租稅後轉の意義に就いての一考察(商業論叢、六卷二號)



神戸正雄 租税賦課機關の問題 (經濟論叢、三四卷六號)

渡邊善藏 貯蓄銀行に於ける營業收益税の附加税に就て (自治研究、八卷六號)

宿利英治 貯蓄銀行に對する營業收益税附加税の課税標準に就て (自治研究、八卷五號)

汐見三郎 六大都市市民の租税負擔 (都市問題、一四卷六號)

大谷政敬 イエヒト氏の財政の意味 (一) 財政の普遍的範疇 (立命館學叢、三卷〇一號)

小川郷太郎 現下の財政經濟問題 (國家學會雜誌、四六卷七號)

永安百治 戶數割代税の現状と其の改正 (都市問題、一五卷一號)

神戸正雄 市町村税制の改正に就て (都市問題、一五一卷一號)

瀬川次郎 昭和七年度實行豫算の決定 (同志社論叢、三八卷)

神戸正雄 租税と公益 (經濟論叢、三五卷一號)

高砂恒三郎 獨逸地方團體收益財産の財政的意義 (經濟時報、四卷四號)

藤谷謙二 米國諸州の分與税に就て (經濟

時報、四卷四號)

松野賢吾 モンベルト「財政學」(一) (長崎高商研究館叢報、一九卷五號)

英國大藏大臣チェムバレン氏の一九三二年度豫算演說 (大藏省調査月報、二二卷六號)

英國歳入豫算に於ける關稅收入の地位 (日本商工會議所經濟月報、四卷六號)

汐見三郎 所得別及職業別に依る負擔關係 (都市問題、一五卷二號)

藤谷謙二 地方稅負擔の不均衡と租稅收入の分與制度 (都市問題、一五卷二號)

松野賢吾 モンベルト「財政學」(二) (長崎高商研究館叢報、二〇卷一號)

筈信太郎 預金部資金運用論 (中央公論、四七卷九號)

英國一九三二—三三年度財政說明書 (大藏省調査月報、二二卷七號)

松野賢吾 印度財政の基調 (商業と經濟、一三卷一號)

三好重夫 英國に於ける國庫交付金制度 (二二) 自治研究、八卷八・九號)

黒羽兵治郎 大阪市中の區町費に就て (經濟時報、四卷六號)

阿部賢一 恐慌下の財政均衡及び財政彈

力性 (早稻田政治經濟學雜誌、二六卷)

毛里英於菟 勤勞所得分配の實證的研究——主として、所得免稅点以下の所得に就いて (經濟論叢、三五卷二號)

汐見三郎 齋藤内閣の財政政策 (經濟論叢、三五卷二號)

牧野輝智 財政上の見地から時局匡救案を檢討す (改造、一四卷九號)

土方成美 財政整理 (經濟往來、七卷一〇號)

大谷政敬 財政の社會學的根本類型 (經濟論叢、三五卷二號)

安井英二 地方財政調整交付金制度の意義 (自治研究、八卷九號)

大山敷太郎 幕末の財政紊亂について (一) 幕末特有の新經濟續出を中心として (經濟論叢、三五卷三號)

永安百治 法人特別税の限度 (自治研究、八卷九號)

神戸正雄 滿洲國税制及其批判 (經濟論叢、三五卷三號)

神戸正雄 滿洲國税制及財政策 (經濟論叢、三五卷二號)

昭和七年度一般經濟歲入出豫算 (朝鮮總督府調査月報、三卷八號)

## 財政學

## 一五四

- 大谷政敬 **イエヒト氏の財政の意味** (二) 立命館學叢、四卷(二號)
- 汐見三郎 **所得に關する疑義** (經濟論叢、三五卷四號)
- 神戸正雄 **賣上税に依る奢侈課税** (經濟論叢、三五卷四號)
- 土田杏村 **大内氏財政學再論難** (經濟往來、七卷二號)
- 花戸龍藏 **新課税原理學說と其批評** (三) (國民經濟雜誌、五三卷四號)
- 田川大吉郎 **戰債と軍縮** (國際知識、一二卷一〇號)
- 横島正彦 **東京市の行財政に就て** (都市問題、一五卷四號)
- 八木澤善次 **ペイ・マイエットと明治初期の財政** (經濟學論集、二卷九號)
- 松野實吾 **モンベルト「財政學」** (三) (長崎高商研究館彙報、二〇卷二號)
- 大内兵衛 **臨時議會は何を匡救しただらう? 時局匡救豫算解説** (中央公論、四七卷二號)
- 奉天省租稅制度 (滿鐵調查月報、一二卷九號)
- 大谷政敬 **イエヒト氏の財政の意味** (三) (立命館學叢、四卷二號)
- 綠川光雄 **英國の公債低利借替の意義**
- (銀行論叢、一九卷五號)
- 阿部賢一 **危機に立つ我國財政** (經濟往來、七卷一二號)
- 北崎進 **國際重複課税回避法の進展** (政經論叢、七卷四號)
- 米原七之助 **ゴールドシャイドの財政學說と其批判** (經濟學研究、二卷二號)
- 西野喜興作 **再禁止後の財政と其前途** (東洋經濟新報、一五三二號)
- 大畑文七 **財政學と社會學** (内外研究、五卷一號)
- 大内兵衛 **「所得と消費稅負擔との關係」——內閣統計局の調査について** (大原社會問題研究所雜誌、九卷二號)
- 青木得三 **増稅論** (エコノミスト、一〇卷二〇號)
- 神戸正雄 **多收手段としての酒稅** (經濟論叢、三五卷五號)
- 永安百治 **地方稅制の改正と地方財政の調整** (法律時報、四卷一〇號)
- 高木壽一 **非常時内閣の財政政策** (エコノミスト、一〇卷二二號)
- 松野實吾 **モンベルト「財政學」** (四) (長崎高商研究館彙報、二〇卷三號)
- 小山田小七 **我國の市町村義務費に就いて** (上) (經濟論叢、三五卷五號)
- 大村清一 **家屋賃價格調査方法の改正に就て** (自治研究、八卷一一號)
- 阿部賢一 **危機豫算とインフレーション** (改造、一四卷一二號)
- 大竹虎雄 **國費と地方費** (九) (自治研究、八卷一二號)
- 花戸龍藏 **新課税原理學說と其批評** (四) (國民經濟雜誌、五三卷六號)
- 高田保馬 **増稅と資本蓄積** (經濟往來、七卷一三號)
- 菊池慎三 **大東京當面の財政諸相** (都市問題、一五卷六號)
- 森原嘉逸 **東京市佛貨公債訴訟事件梗概** (一) (法曹公論、三六卷一一號)
- 柴田周吉 **獨逸に於けるコンツェルン課税に就て** (三、完) (會計、三一卷六號)
- R・C・ロング **獨逸の佛債券買戻し法** (外國の新聞と雜誌、二七五卷)
- 船田勇 **表解相續稅便覽** (二、完) (會計、三一卷六號)
- 高木壽一 **本邦財政の必然的動向と累進課税の經濟的作用に就て** (三田學會雜誌、二六卷一二號)
- 星野直樹 **滿洲國財政の現狀を展く** (經

清住來、七卷一三號)

我妻東策 明治前期の地租問題 (農業經濟研究、八卷四號)

小山田小七 我國の市町村義務費に就いて(下) (經濟論叢、三五卷六號)

英國五分利付一九二九年乃至一九四七年期限軍事公債の借換に關する調査(一)(大藏省調査月報、二二卷一一號)

最近日英米三國に於ける租税の減收に就て(一) (東京商工會議所商工月報、八卷一一號)

我國に於ける歲入の正常的増加率 (東洋經濟新報、一五二七卷)

大谷政敬 イエヒト氏の財政型態論(一) 立命館學叢、四卷四號)

瀬川次郎 Capital Levy に關する若干の考察(二、完) (同志社論叢、三九卷、頁三一—四八)

淺見信次良 中世及近世佛蘭西財政史(三) 濠根高商論集、一二卷)

最近日英米三國に於ける租税の減收に就て(二) (東京商工會議所商工月報、八卷一二號、頁一一—六)

借金財政の及ぼす苦惱は意想外に甚しい (東洋經濟新報、一五三〇卷)

## 解題者附記

經濟學と財政學の文獻解題はさだめられた計劃どほりに果されてゐない。いくつもの困難があつた。(1) 解題者はすべての文獻を往見はできなかった。この書目は刊行の月をも記載すべきさだめであるが、書を往見しないでそれをすることはできない。やむなく單行本については「内務省納本月報」にもとづいて、ほゞ配列をきめた。本のなかみについて、ことばをそへたばあひをのぞき、しめされてゐる月は、みぎの「月報」にかげられた月をかたるにすぎない。事實には、それよりひとつきかふたつきぐらゐさきに刊行されたものと推定された。(2) 文獻のなかみについて、ことばをそへることは、このたびは、雜誌論文以外のものにかぎられてゐる。雜誌論文は、あとで、おほむねまとめられて單行

本となり、紹介批判をかうむる機會をもつ。だが、ここでそれらの紹介がないのは、そのためでない。解題者の手も力もとどかなかつたのだ。(3) 雜誌論文以外のものでも、なかみについてことばがそへられてゐるのは、わづかである。解題者が、とりあげたいとおもひながら、さうできなかったものは、十種以上ある。本を手にすることができないか、時間がないか、いづれかであつた。この書目のほかの各部門をうけもたれて、しごとを計劃どほりにはこばれた執筆者諸氏にたいしても、讀者にたいしても、あひすまぬ次第だ。つぎの年度のためには、あらかじめ用意があるから、ふたたびおなじおわびをくりかへさないですむかもしれない。以上。